

だいよんかい
第4回

→「**ども**海田文学賞

うみ

ぶんがくしょう

作へん品ひん集しゅう

なぞだらけの船ふね

く想像そんぞうをふくらませて

目次

〈小学生の部〉

最優秀賞

「なぞだらけの船く想像をふくらませて」 大阪府立阪南小学校三年 立山怜佳

優秀賞

「アザラシのおなか」 倉敷市立緑丘小学校一年 三宅董

「一首の歌から広がった須磨の海」 神戸市立東須磨小学校五年 新谷まり香

「海を走る大型船の誕生物語く大型船に潜むタックス・ハイブンの闇」 豊橋市立福岡小学校六年 志賀 優龍

入賞

「あなをなくす」 愛媛大学教育学部附属小学校二年 若狭早

「ぼくの地引網」 船橋市立田喜野井小学校五年 田中 佑築

「またウミガメに会うために」 江東区立豊洲北小学校二年 大宮 来奈

「豊かな海をつくるために」 伊丹市立荻野小学校六年 木元 孝亮

〈中学生の部〉

優秀賞

「海が教室になった日」 昇陽中学校二年 安永護

「魚の命と父への感謝」 長与町立長与中学校二年 柿本 杏奈

入賞

「進化の証」 長与町立長与中学校二年 西田 名穂

「ソーシャルメディアが変える海の姿」 みさき

※作品名は五十音順

〈選考委員講評〉

最相葉月

たなかしん

〈あとがき〉

明石おさかな普及協議会会長 川崎 喜昭

〈作品集資料〉

112

108

104 100

92 88

82 76

70 66 60 53

38 32 24

8

〈しょうがくせい小学生の部ぶ〉



なぞだらけの船く想像をふくらませて

おおさかしりつはんなんしょうがっこう さんねん
大阪市立阪南小学校 三年

たて やま
立山 怜佳

わたしは、歴史が好きでよく伝記や歴史まんがを読みます。ひみこの本を読んで
いるときに、親が言いました。

「住居や土器とか大きき分かる？」

「わからない。」

と答えました。そうすると、大阪府の和泉市にある池上曾根遺跡と弥生文化博物館
に連れて行ってくれました。池上曾根遺跡では復元された堀立柱建物・竪穴住居等

を見て、弥生文化博物館では器や集落を再現した展示物を見ました。その時に、お
ばあさんが服の体験コーナーがあることを教えてくれました。弥生時代の人たちの
かんとういやひみこの服がおりてありました。かんとういは白っぽいかんたんな服
なのに、ひみこの服は、赤いスカートみたいなものの上に白い着物のようなもの、
さらに上から青と白の長い服を着ました。おしやれでかわいかったです。
読むだけではなく体験ができてすごく楽しくてうれしかったです。

「また行きたい！」

「いい所に連れて行ってあげる。」

ある日、また親から言われました。天王寺駅からJRに乗り、奈良駅からバスに
乗って着いたところは平城宮跡でした。最初に見えたのは、広い広場でした。おく
の方に建物が見えました。案内図によると、広場は朱雀大路で、建物が朱雀門でし
た。広場ではなく『みち』でした。私の小学校がすっぽりと入りそうなくらい広くて、
本当に何も無かったです。建物は昔のものではないそうです。まずは、目的の服の
体験をしに行きました。

いろいろな展示を見ながら、体験コーナーを探しました。平城京は、唐（中国）の

長安をモデルにして作られて、東西、南北それぞれ四キロメートルを超える大きさだったそうです。朱雀門より内側が平城宮で政治の中心の大極殿や天皇のお家や官公庁が集まっていたそうです。長安は平城京の数倍も大きかったそうです。(参考一) ふむふむと思しながら、進みます。体験コーナーは、大きな展示室のおくの方にありました。

奈良時代の服がいくつか置いてありました。男女の服がとてもカラフルです。女性の服は、そでの所が赤色で、ベストみたいな上着は赤色でした。下半分はスカートになっていて、たてに、赤色、ピンク色、黒色、黄色、黄緑色、水色が並んでいました。大きなうちわのような物を持って写真をとってもらいました。男性の青い服も着ました。展示によると、男性は、位がどれだけえらいかで服の色がちがうそうです。また、親が前に見ていた韓国の昔の時代のドラマの服に似ていました。今回の体験も満足でした。

「次は、どこに行つて何を着ようかな。平安時代の十二ひとえがいいな。」

お昼ご飯を食べた後に、外で大きな朱色の船を見つけました。

『なんでこんな大きい船がここにあるのだろう。』

と思いましたが。大阪から山もこえて時間をかけて来た場所になぜ船があるのか不思議に思いました。船の上に乗ることができるといいだったので、船の方へ向か

いました。途中にあった説明パネルには『遣唐使船』と書いてありました。説明パネルを読みながら、近づいていきます。

むずかしいですが、西暦六三〇年ごろ、遣唐使節が海を渡つて唐の都・長安を目指したそうです。奈良を出て、大阪の住吉大社に行き、瀬戸内海を通つて九州の大宰府へ、その後、東シナ海を渡つて、唐を目指したそうです。その際に使われた船が遣唐使船ということが分かりました。(参考一) また、説明パネルの中に出てきた住吉大社は、私が初もうでに行ったことがある近くの神社です。なんだか興味があわいてきました。

『遣唐使の資料は公式記録として残っているが、その往復に使用した「船」に関してはほとんど資料がなく、どの位の大きさかを示す数字は残っていない。大きさを推定するてがかりとして、奈良時代の資料に約六〇〇人を四隻の船で派遣したとの記録があるみたい。遣唐使船として教科書などに出てくる絵は、大部分が「吉備大臣入唐絵詞」という絵巻物の絵で、この遣唐使船を描いた最も古い絵巻物は、最後の遣唐使派遣から四〇〇年ほど後になって描かれた絵で、実際に唐に派遣されていた時代の船の資料はなく、「吉備大臣入唐絵詞」と同じに見えるようにつくられている。全長三十メートル、全幅九・六メートル、排水量三〇〇トン、積載荷重一五〇トン。(参考一)』

『大阪から出て、瀬戸内海を通って、東シナ海を横切って唐に行くのに、本當にこんな小さい船でたどり着くのか。』と不思議に思いました。

船に乗り込むことができました。船の真ん中あたりに、朱色の大きな柱が二本、立っています。帆船です。かべが白色で、ふちの所が朱色になっていました。窓の所に少し緑色が使われています。小部屋のようなものが、三つあります。一番前の部屋が雑居部屋、パネルからは使われ方は分かりませんでした。二番目はかまどがあって火を使ったのではないかと想像されているそうです。三番目は遣唐大使の部屋と思われるそうです。また、一五〇人の人は、甲板の下の積荷の間などで寝ていたのではないかと推測されています。(参考一)

私の小学校は一クラス三五人クラスで、一五〇人ということは大体四クラス分です。『大人の人で、積荷もあるだろうからなかなかぎゅうぎゅうで乗っていたのかな。夜も船をそうじゆうする人や見張りの人もいただろうから、何とかあったのかな。小部屋は三つしかないから雨が降った時とかどうしていたのだろう。』かと思いましたが、説明パネルの表現も少し変でした。遣唐使船の資料が残っていないみたいなので、『〜と想像される。』とか『〜でしょう。』とかいっぱいで、なぞに満ちています。

遣唐使船を見た後は朱雀門をくぐって、大極殿へ向かいました。朱雀門は、朱色がとてもきれいでした。朱雀門の向こうもとても広い広場が広がっています。おくの方に前後に二つ建物が見えます。前は、何か工事をしていました。向かおうとすると、『あれ？踏切りが？』え、電車が来た……。『電車が通り過ぎるのを待ちました。広場には電車が通っていました。これもびっくりしました。そこからひたすら歩いて、大極殿も見学してから、東大寺の大仏も見て帰りました。鹿せんべいの売店の前に行ったら、買う前から鹿に囲まれて怖かったです。』

家に帰って、遣唐使のことが気になったので、図書館で本を借りました。

『飛鳥時代から平安時代初期のおよそ二〇〇年間にわたり、日本から遣唐使が派遣された。唐は国土の大きさ、すぐれた政治のしくみや文化などへの尊敬をこめて、人びとから「大唐」と呼ばれた。一二〇人から一五〇人あまりの人びとを乗せ、あれくるう海をわたって長い航海をしなければならなかった。その航海のために、特別につくられたのが遣唐使船ですが、遣唐使船の大きさ、形、構造などは、ほとんどわかっている。さまざまな資料をもとに推定される遣唐使船の大きさは、長さ約二五メートル、幅七〜八メートルほどで、二枚の帆をそなえた帆船だった。ろうといわれている。帆柱の高さは八メートルほど。風が弱いときは「ろ」でこが

なければならなかった。しかし、つくりなれない大船だった。約二〇〇年間のあいだに派遣された遣唐使船四〇隻ほどのうち、十二隻は遭難している。「遣唐使船は死の船だ」という人もいた。遣唐使には、大使・副使・判官、唐に学びにいく人、航海の安全をいのる神主・占い師・水夫などたくさんの人が乗っていたそうです。(参考二)

やはりくわしいことが分かっていない船なのだと思います。また、私は計算してみました。一隻に一五〇人として一二隻が遭難したのであれば、一八〇〇人の人が亡くなっているのだと思うと、それは「死の船」と言われるはずだと思います。やはり小さな船で唐を目指すのは大変みたいです。

住吉大社にも行ってみました。大阪市の住吉区にあります。家から自転車で行くことができます。インターネットで親が、住吉大社を案内してくれるガイドさんを調べてくれました。ドキドキしながら電話をかけました。遣唐使船と住吉大社のことについて知りたいと説明したら、案内してくれることになりました。

住吉大社の反橋(たいこ橋)の前で待ち合わせをしました。半円の形をした赤い大きな橋です。上るのは大丈夫ですが、下るときはドキドキします。おじいさんが一人待っていてくれました。住吉大社の入口に「遣唐使進発の地」と書かれて絵

がはめ込まれた大きな石があります。その前で説明をしてくれました。その絵には、住吉大社とたくさんさんの松、出航した四隻の遣唐使船が描かれていました。

「遣唐使船の時代には、住吉大社のすぐ前は砂浜で海があり、住吉大社の南側にあつた住吉の津(すみよしのつ)という港があつてその港から出航したそうです。住吉の津は後で(すみよしのつ)と呼ばれるようになったそうです。(参考三)

ちなみに、すぐ前というのは西側で、今は住宅やお店が並ぶ普通の街になっています。砂浜だったとはパッと見では分かりません。おじいさんの持っている地図を見ると上町台地と書かれています。上町台地の少し西側から海になっていました。社会の授業で大阪市の勉強をしました。大阪市には、大阪城あたりから南の方向に東西約二キロメートル、南北約一二キロメートルの土地が高くなっているところがあり上町台地と言われています。大阪城をはじめとして、難波宮跡や四天王寺などの寺や神社など、古くからの建物が多く残っているそうです。(参考四) こんなところまでつながっているのかと思ひながら聞きました。

「最初の頃は、住吉津から出て、時代が後になると、難波津から出るようになったそうです。難波津というのは、(住吉大社からみて北方向にある)難波宮の近くの港です。難波宮は大阪城の近くにありす。そこから出るようになっても住吉大社でお祈りをしてから唐に向かったそうです。遣唐使船の長さは三〇メートル、幅八

メートル、帆柱二本で平底箱型をしていたそうです。一隻に一〇〇名から一五〇名が乗りこみ、最初の頃は二隻で、八世紀くらいから四隻になったそうです。唐の時代に二〇回ほど派遣され、成功したのが十数回程度と言われているそうです。遣唐使船に乗って唐へ行った有名な人として空海・最澄・山上憶良・阿倍仲麻呂がいて、唐からは鑑真がいるそうです。遣唐使船には、お社があり、住吉大社の神主さんが一隻に一名ずつ乗りこんだそうです。住吉大社は、二一一年に創られて、海の中から現れた三柱の神様ともう一柱の神様が祭られています。海上安全の守護神です。』(参考三)

最初は住吉津から、途中で難波津から出るようになったことも分かりました。また、本に書いてあった神主さんが、住吉大社の神主さんだとつながりました。住吉大社でお祈りするだけでなく、神主さんも乗るといことは、それだけ唐までが遠いので、危ないことが多かったのかと思われました。「遣唐使進発の地」の石の裏側にも、遣唐使の航海を心配している歌が紹介されていました。また、国のためにも絶対に成功させなくてはならない仕事だったのかなと思われました。

帰りにおじいさんが、教えてくれました。一寸法師のお話でおじいさんとおばあさんが子どもを欲しいとお願いしたのが住吉大社だそうです。初めて知りました。

大阪歴史博物館にも行ってみました。大阪城の近くにある博物館です。この近くに難波津があったはずですが。

『難波は大陸文化の窓口であった。難波を発した七、八世紀の遣唐使・遣唐使は二二回、遣新羅使は三二回に及び、また海外からの使者も隋・唐から十回、新羅からも六六回も来着している。難波津には外交使節である客館も建ち並んでいた。』(参考五)

ここでも『想像』図です。難波津からも遣唐使が行ったのだとわかりました。

住吉津・難波津を出て、瀬戸内海を通って、東シナ海を横切って唐に行くのですが、その航海の間はどうだったのだろうかと調べてみました。

『難波津を出航した船は、はじめはおだやかな瀬戸内海を西に進んで、筑紫の博多湾でいったん停泊した。帆船なので追い風がふかないときには、順調に航海することができなかつた。航路はおもに三つあって、六〇〇年代は、北路の朝鮮半島の陸沿いに進む比較的 안전한航路を使って一か月かかった。半島を統一した新羅と関係が悪くなって使えなくなつた。南路は、中国大陸へのもっとも近い航路で、風にめぐまれると十日ほどで唐に着いた。しかし、そこには東シナ海と荒海がまっていた。そして毎回のよう遭難する船が出ていた。』(参考二)

私も、北九州に行く時に、瀬戸内海をフェリーで行ったことがあります。フェリーは、夕方に大阪南港を出て、翌朝に北九州の新門司港に着きます。人の他にトラックや車もたくさん乗せることができます。大きい船で、案内板によると八階の表示があります。総トン数一五〇二五トン、全長一九五メートル、全幅二七・八メートル、航海速度二三・二ノットです。(参考六)フェリーは、遣唐使船よりも幅は約三・五倍、長さは約六・五倍大きかったです。

フェリーに乗り込むと、エントランスがあり、階段、エレベーターもあります。海側に客室がずらりと並んでいます。客室に入ると、ベッドとテレビ、トイレもついています。窓からは外の景色も見ることができます。フェリーは、とっても大きい展望浴室、レストランもあったけど、それらは、遣唐使船にはありません。遣唐使船には、わたしが、ふだん使っているものがありません。かいてきなかんきょうは期待できず、大変な苦勞をして航海したはずですよ。

遣唐使船では何を食べていたのでしょうか。私は、夜ごはんにお弁当を、朝ごはんは、フェリーのバイキングでした。遣唐使船では航海中に何を食べていたのか正確な記録はないそうで、一日あたり干飯(ご飯をかわかししたもの)一しよと水一しよを支給した記録があるそうです。(参考一)お手伝いでご飯を炊くときいつも三合を計ります。一合のカップが十で一しよだと教えてもらいました。

一五〇人分だとするとたくさん積んでいたのだからと思います。でも寝る場所も贈り物に乗せる場所も必要だから、食べ物・飲み物は瀬戸内海だと途中で陸地によって新しいのを買ったのだから、東シナ海は、がまんばかりだったのではないかと思います。

フェリーが出港し、少し行くと神戸の方が明るく見えてきました。とてもきれいです。見どころは、いつもバスで通る明石海峡大橋の下をフェリーでくぐることです。イルミネーションの色がとてもきれいでした。遣唐使船の時は、真っ暗な中行ったのだらうと思いました。

フェリーでびっくりしたのが、車のナビみたいにとどこを走っているのかが、客室のテレビですと見られたことです。外は、真っ暗ですが、どこを走っていて、近くに何があつてというのがとてもわかりやすかったです。星や太陽を見て目にした。少しエンジンのしんどうを感じるていどです。『遣唐使船は、ゆれたりしなかつたのかな。瀬戸内海は穏やかだというから、東シナ海が大変だったのかな。』

フェリーは新門司港に着きますが、遣唐使船はさらに関門海峡を通過して大宰府に向かいます。わたしは、関門海峡も行ったことがあります。山口県の下関口から、地下トンネルを通過して福岡県の門司口に出ました。ここは本州と九州の間が一キロ

メートルもありません。歩いて一五分もかかりませんでした。海の上は、船がスピードを出してどんどん通り過ぎていました。『あそこを遣唐使船も通っていったのか。』遣唐使船は、その後大宰府をでて東シナ海に出るそうです。

遣唐使船が持って行ったもの、持って帰ってきたものとしては次のようなものがあります。遣唐使が唐に持って行ったものは、銀・絹織物など。遣唐使が唐から持って帰ってきたものとして各種作物(白菜・ピーマン・スイカ)、遊具・ゲームなど(サイコロ、双六、いごなど)、貨幣、占い・天文学・暦法、楽器、野菜発酵技術(漬物等)・そ、みそ、しょうゆ)、スパイス・薬草・こしょう・シナモンなどがあるそうです。また、唐の皇帝から頂いた銅鏡や銀器など。留学生や留学僧の持ち帰る書物、仏像、経典。さらに使節などの人達、技術習得のために派遣された工人などが購入した品。そのうちいくつかは「正倉院宝物」として現在でも見ることができそうです。唐から僧侶や彫刻師などの技術者、遠くはペルシャの人も便乗して来日したそうです。(参考一)唐で学んだ人びとが持ち帰った、貴重な書物や新しい知識、数多くの品々は、日本の政治や文化に大きな影響をあたえたそうです。例えば、政治のしくみや、宝物、服そうや持ち物、仏教などだそうです。

(参考二)

なるほど、遣唐使船が、唐から色々なものを持ち帰ってきて、政治や文化が発展していったから平城宮跡に展示してあるのだと思いました。

わたしはスイカが大好きで、夏に二、三回すいか割りをします。この時に遣唐使船が持ち帰ってきていたのか。持って帰ってきてくれてありがとう。ほかの野菜もしょうゆ、みそ、スパイス、シナモンなど今の生活にぜったいに必要なものばかりです。感謝です。算数の問題でよく出てきて、私をなやませるサイコロはいらなかつたです。

遣唐使船は、分からないことがいっぱいだったので、色々な想像を楽しみました。でも、今の生活にも残っている・使っているこんなに色々なものを持ち帰ってきた遣唐使船は、なぜくわしく記録がのこっていないのだろうか。



- （参考本）説明など）
- （参考一）平城宮跡歴史公園、説明パネル
- （参考二）しらべ学習に役立つ日本の歴史④
遣唐使船をしらべる、古川清行監修、渡辺誠著、株式会社小峰書店
- （参考三）すみよし歴史案内人の会
- （参考四）私たちの大阪 3年、日本文教出版
- （参考五）大阪歴史博物館、説明パネル
- （参考六）パンフレット『COMFORTCRUISE』、名門大洋フェリー

アザラシのおなか

倉敷市立緑丘小学校一年 いちねん

三宅 堇
み やけ すみれ

ぶにつ、ぶにつ、ぶにつ。

私は、今、アザラシのおなかをさわっている。何かに、かんしよくがにている。あれ、何だっけ。

二〇二五年十二月十九日。

私は、きのうまで、インフルエンザにかかって、学校が出せきてい止になっていた。とつぜん、四十どちかくのたかいねつが出たけど、早く下がった。それから、外

に出られなくてたいくつだったので、早く学校に行きたかった。今日、ひさしぶりに学校に行けた。たのしい気もちでいえにかえつてくると、おかあさんが言った。

「アザラシ、さわりに行かない？」

「えっ！行きたい！どこに行くの？」

「しぶ川マリン水ぞくかん」

「行きたい！行きたい！わーい！」

私は、うれしかった。さいきん、また行きたいなあと思っていたところだった。しぶ川マリン水ぞくかんへは、おかあさんと何ども行ったことがある。けれど、こともえんのえん足で行ったときから行ってなかった。

「いつ、行くの？」

「二十八日、日ようび」

私は、カレンダーを見て、がっかりした。すぐにアザラシをさわりたいからだ。
十二月二十八日 十一じ。

「うけつけが一じ三十分だから、おきて」

さむくなるとおきるのが苦手な私は、おかあさんにおこされた。

「今日は、あたたかくなるみたいだよ」

そう言われても、へやの中はさむいので、ふとんから出たくない。アザラシにあい

たいけど、私は、ぬくいふとんの中で、体をごろごろさせた。
十二じ十五分。

いえの外に出ると、あたたかかった。おかあさんがうんてんする車で、出ばつだ。
「まにあうだろうか」

おかあさんがとけいを見て、ふ安そうに言った。

しぶ川マリン水ぞくかんまでのみちは、うみを見ながらはしっていく。うみに、た
いようの光があたってキラキラかがやいている。青い空には、パラグライダーがと
んでいる。

「せと大はしだ!」

「あれ、ふじ山!」

私は、うみにうかぶものを見て、言った。

「えっ? ふじ山? ああ、ふじ山みたいなしまのことを言ってるの?」

おかあさんが、わらった。だいじょうぶ、じかんは、きつとまにあう。私は、ねがった。

一じ二分。

「思ったより、早くついたね」

私(わたし)がねがったとおり、まにあった。

「十五分になったら、むかおうか」

車(くるま)の中で、出かけるしたくでたべるじかんがなかったおかあさんが、バウムクーヘ
ンをたべながら言った。

一じ一七分。

ちゅう車(しゃ)じょうから、水ぞくかんまではあるいて二分くらいだ。入り口(いりぐち)まえのうり
ばで、かんらんけんをかう。そのとき、

「ちゅう車(しゃ)けん、わすれた! まってて」

おかあさんが、ちゅう車(しゃ)じょうへ、はしって行った。うりばでかんらんけんをかう
ときに見せると、ちゅう車(しゃ)一(いち)じかんをサービスしてくれるのだ。一分(いっぽん)くらいで、お
かあさんはもどってきた。大人(おとな)は水(みず)いろ、子どもはピンクいろのけんを買(か)った。

しよく員(いん)さんに見せて中(なか)に入(はい)ると、私(わたし)は、目のまえにあった「ふれあいタイドプール」
へ、はしって行った。ここには、水ぞくかんのまえのうみで、じもとのりょうしき
んがつかまえてきたさかなを、見ることができる。

一じ二十五分。

「一(いち)じ三十分(さんじゅうぶん)から、だい三(さん)てんじしつでうけつけするから、そろそろ行くよ」

もうすこし、「ふれあいタイドプール」を見ていたかったのに、おかあさんのよぶ
こえがした。むかうと、行(い)れつができていた。

「うけつけできるだろうか」

ならばながら、おかあさんが、ふ安そうに言った。

「定員三十人です。おならびにいたいても、さんかできないばあいがあります。もうしわけありません」

かかりの人が、これから行れつにならぼうとしていている人たちに、ていねいに言っていた。だいじようぶ、きつと、さんかできる。私は、ねがった。でも、今とは、すこしふ安だった。

一じ三十分。

うけつけがはじまった。かかりの人が、せいりばんごうのフダをじゅんばんにわたしていく。

「三人です。二十九ばん、三十ばん、三十一ばん」

私のまえにらんでいた人たちに言っている。私たちは、行れつの一ばんさいごだ。さんかできないのかなあと思ったそのとき、

「何人ですか？」

「二人です」

「三十二ばん、三十三ばん。このばんごうフダと、手くびに赤いリングをつけて、五十五分に、またここにおあつまりください」

「ありがとうございます」

かかりの人とおかあさんがはなしているのをきいて、かかりの人がやさしいサービスをしてくれたのがわかった。

一じ五十五分。

だい三てんじしつで、しゆく員さんが、アザラシについてモニターを見せながら、せつ明をしてくれた(さんこう一)。

しぶ川マリン水ぞくかんには、二とうの男の子のゴマフアザラシがいる。二〇二〇年三月生まれ、五さいの、もち丸とうるちだ。

もち丸は、好き心がつよい。ゆだんすると、バケツの中までたべようとするくらいしんぼうだ。体も大きい。

うるちは、おくびようだ。ごはんをたべるときに、目をつぶるへんなくせがある。もち丸より、体はスリムだ。

せつ明がおわると、アザラシについて〇×クイズがはじまった(さんこう二)。

アザラシは、人げんと同じほにゆうるいであること。目のうしろに耳のあながあって、およぐときは、ちぢめてふさぐ。おへそもあって、おなかにいる赤ちゃんへ

そのおでつながる。体のもようは、一とうずつちがう。人げんとよくにているところがあって、私はおどろいた。さいごに、しゆく員さんと、アザラシプールに入るときに三つのやくそくをした(さんこう三)。

- 一、プールの中では、はしらない
- 二、アザラシのかおのまえには手を出さない
- 三、しいく員さんのおはなしをきく

二じ五十分。

しいく員さんのせつ明と、○×クイズで、アザラシのことをたくさん学んだ私は、ついに、アザラシにあえることになった。まず、アザラシプールに入るために、くつのうらをしようどくそうに入れた。手ゆびのしようどくもした。プールへのかいだんを下りていくと、もち丸とうるちが、水をぬいたプールのそこで、ごろごろしていた。あさ、さむくてふとんから出たくない私みただった。

私は、もち丸をさわりたいなあと思っただけど、しいく員さんのもっているバケツのさかながへって、くいしんぼうのもち丸は、まだたべたがっていて大人しくできなさそうだった。大人しくゆつくりさかなをたべている、うるちをさわることになつた。

はじめは、せなか。なれてきて、おなかもさわらせてもらった。

ぶにつ、ぶにつ、ぶにつ。

うるちのおなかは、太つたと気にしている、おかあさんのおなかをさわったときと、かんしよくがにっていた。

「ひし、ですよ」

しいく員さんが、おしえてくれた。アザラシのひふの下に、ぶあついしぼうが、かさなっている。この、ひしがあるから、アザラシはつめたいうみの中でも、体おんちようせつができるのだ(さんこう四)。

おわかれするとき、うるちが私にまえ足でバイバイしてくれてかわいかった。私も、「またあいにくるよ」と、うるちに手をふった。

八じ。

私は、おかあさんといっしょにおふろに入った。おかあさんのおなかを、さわってみた。

ぶにつ、ぶにつ、ぶにつ。

「何してるの？」

おかあさんがわらって、おなかを、ぶるぶるとゆれた。おかあさんのおなかは、アザラシのおなかより、やわらかかった。そして、あたたかかった。

へきん(こう)

さんこう「から四

しぶ川マリン水ぞくかん「アザラシふれあい体けん」午このぶ

一首の歌から広がった須磨の海

神戸市立東須磨小学校 五年
新谷 まり香

私にとって須磨の海は、いつも人の気配がある、にぎやかな場所だ。夏になると、海水浴場としてたくさんの方が訪れる。春や秋には、色とりどりのテントが並び、マルシェが開かれる。小さいころから、私はその光景を見るたびに、須磨の海は「人と笑顔が集まる、いきいきとした場所」なのだと感じてきた。そんな須磨の海に、私は特別な思い出がある。私が出店者として海辺のマルシェに参加したときのことだ。

お客さんへ

「これ、いいですね。」

と声をかけてもらい、少し緊張しながらも笑顔で答えたことを覚えている。潮風が吹く中で、人と話し、物を手渡す時間は、学校とはちがうワクワクがあった。ただ楽しいだけでなく、

「人と関わることっておもしろい」

と初めて強く感じた、大切な経験だった。だから、私は「海」という言葉を聞くだけで、活気あふれる須磨の海のイメージが、真っ先に頭に浮かんでくる。

小学三年生のとき、学校の授業で百人一首に初めて触れた。札を取るの楽しかったが、そのころの私は、歌の意味まではあまり考えていなかった。ただ、もともと本を読むことが好きだった私は、

「この歌たちは、どんな気持ちで作られたのだろう。」

と少し気になった。そこで図書館へ行き、百人一首について書かれた本を借りてみた。それが、私と行平の歌との、最初の出会いだった。

その本は、ただ歌が並んでいるだけではなく、歌の内容がテーマごとに分かりやすく分類されて紹介されていた。興味深くページをめくっていくうちに、私の手が止まった。それは、百人一首に収められている歌のテーマのバランスにびっくりしたからだ。

「恋の歌」が百首のうち四十七首もあるのに対して、「別れの歌」というテーマには、たった一首しかない。その歌が気になって、私はじっくりと読み込んでみた。

「たち別れいなばの山の峰に生ふる まつとし聞かば今帰り来む」
作者は中納言行平という人物だ。そのときの私は、まだ歌の意味もよく分からず、ちんぷんかんぷんだった。それでも、四十七首もの華やかな恋の歌に囲まれて、ぼつんと一ツだけ存在しているこの歌は、当時の私に強いインパクトを残した。

ある休日、街の歯医者さんで診察を待っているとき、棚に置かれた分厚い本が目に入った。内容が古そうで、

「学校でやった百人一首と関係しているのかな」

と思い、手に取った。開いてみると、そこには須磨の歴史が紹介されていた。さらにページをめくると、海を背景にした古い絵が目飛び込んできた。

「これって、百人一首に出てくる、あの行平だよね。」

思いがけない場所で行平に出会い、私はとても驚いた。

その後、くわしく調べてみると、須磨区の町名にも行平が関係していることが分かった。

「行平町、松風町、村雨町。」

「行平は分かるけれど、松風町と村雨町は何だろう。」

そう思って調べてみると、松風と村雨は、行平が須磨に滞在したときに出会った姉妹の名前だと知った。他にも須磨には行平に関する話がたくさん残っているようで、須磨の町に住む一人として、誇らしく思った。

また別の日、家族で出かけた帰り道、車の助手席に座って何気なくナビの画面を見ていた。すると、そこに「行平町」という文字が表示されていた。私は二度見せずにはいられなかった。

「本当に、今の町の名前として残っているのか。」
本の中の話だと思っていた行平が、今も須磨の町の中に生きているように感じた。

私は、行平について知るうちに、頭の中の点と点が結びついたような気がして、とてもうれしかった。百人一首の中の世界だと思っていた行平が、実際に須磨の海を見て、同じ場所に立っていたと知ったからだ。本の中の話と、今の自分の生活が重なった瞬間だった。

私は今、百人一首の札を使って「競技かるた」を、稲葉公園の建物で週に一度練習している。「稲葉」という名前も、行平の歌に関係している。稲葉で札に手を伸ばすその一瞬、私はただ勝ち負けを競っているのではないと感じる。そこに綴られた五七五七七の言葉を通して、私は時空をこえ、行平をはじめとする昔の人たちとつながっているような気がする。

在原行平のことを知る前、須磨の海は、私にとって身近で、にぎやかな景色の一つだった。けれども今はちがう。行平の歌や、松風・村雨の物語、そして町名に残る名前を知るうちに、須磨の海は、千年以上も前から人々の思いを受け止めてきた場所なのだと感じるようになった。今、須磨の海を見ると、私はただ波を眺めているのではないと感ずる。行平が見たかもしれない同じ海を想像し、百人一首の札にこめられた言葉を思い出す。私にとって須磨の海は、ただの景色ではなく、時間をこえて人の思いが行き交う場所になった。これからも私は、この海を見ながら、歌や言葉にこめられた気持ちに耳をすませていきたい。

〈参考〉

『須磨の歴史散歩』 田辺真人 須磨区役所

海を走る大型船の誕生物語〜大型船に 潜むタックス・ヘイブンの闇

豊橋市立福岡小学校六年 ろくねん

志賀 優龍

ぼくは、二〇二五年の夏、豊橋商工会議所が主催する海の日の祭典「豊橋みなとフェスティバル工場見学ポートバスツアー」に応募し、新来島豊橋造船の見学コースに当選した。船を造る会社の見学は初めてなので、ドキドキとワクワクが爆発

しそうな気持ちで当日を迎えた。見学ツアーに参加したぼくは、三河港の役割を学ぶ体験型の施設「カモメリア」に集合し、ここから観光バスに乗り込んで新来島豊橋造船へ向かった。

三河港は、昭和三十七年五月、豊橋港、田原港、西浦港、蒲郡港の四港が統合してできた。ぼくの住んでいる豊橋にある港は、三河港に統合される前は、豊橋港として独立した港湾だったことから、今でも市内の道路標識は豊橋港で表記されている。豊橋港には、フォルクスワーゲン、クライスラー、ボルボ等の輸入整備工場やパーツセンター等の施設もある。そのため、豊橋港は、自動車の輸入金額と台数が三十二年連続で日本一だ。豊橋が日本列島のほぼ中央にあるという地理的な理由、自動車関連企業が集積していること等の利便性があるからだ。ちなみに、新来島豊橋造船の工場と海を挟んで反対側には、トヨタ自動車株式会社田原工場があり、レクサス等の高級車を生産している。

海のすぐそばに建つかモメリアの最上階にある展望台から見える港の様子は、双眼鏡がなくても、豊橋港ならではの圧巻の景色が広がる。それは、自動車運搬船に運ばれて日本各地又は世界各地で待つ人々の元へ行く無数の車が、整然と並んで、広い敷地の隅から隅まで敷き詰められ、それがどこまでも続いているのだ。運がいいと、自動車運搬船が岸壁につながり、船の運搬用ゲートが開いて、港に

整然と並んでいた無数の車たちが、次から次へと数珠のようにつながって、船に運び込まれていく様子を見ることが出来る。切れ間なく車が吸い込まれるように船の中へ運ばれて港にあった車が次々といなくなる様子は、車一台ごとの間隔も均等だからか、時間を忘れて見入ってしまうほど芸術的な仕事ぶりだ。ぼくの好きな豊橋港の景色の一つだ。

新来島豊橋造船は、豊橋市の臨海地域にある。東京ドーム十一個分の広さのある敷地に、地上からの高さが七十五メートルある大きなクレーン等が三十五個あった。工場の入り口で守衛さんの通行許可を受けたばかりのバスの車窓から見える工場の敷地は、どこまでも続いているようだった。止まっているバスに新来島豊橋造船の人が乗り込み、見学が始まった。

工場の入り口に止まっていたバスの正面には、幅が二十メートル程の通路があり、バスの進行方向の右側には、台に乗った鋼材等や何やら大きな塊が一定の間隔をあけて置いてあった。工場で働いている人たちが移動に原付バイクや自転車等を使っていた。バスの進行方向の左側には、工場の屋根と手前には鋼材等を運搬している大きなクレーンが二台動き、ここからドックまでの間を走るトロツコとレールが二本あった。

バスで少しずつ入り口からまっすぐに続く幅二十メートル程の通路を移動しな

がら、船を造る工程の説明を聞き、車窓から見学した。船をドックで完成させる工程の時は、バスから下車し、ドックのそばに立ち、中をのぞきこんで造船の設備や造っている様子を間近に見ながら説明を聞くことができた。

船を造る工程は、九つあることがわかった。

一つ目は、どのような船を造るのか、船の所有者と話し合いを重ねて、船の図面を作成し、船を設計することだ。この段階で、技術的な確認をする。

二つ目は、加工だ。大きな船は、千六百トンを超える。そのため、船は、いきなり全体を造るのではなく、いくつもの部品がある程度の塊まで組立て、それを大きなクレーンでドックに運び、組み立てられる。例えば、ロボットを造るときに、腕や足の部分の各部品を組み立ててまとまりにしているから、胴体につなげてロボットを組み立てる方法に似ている。

この工程では、地上から五十メートル程の高さのある大きなクレーンを使い、一本の長さが二十メートルを超える鋼材等を船で海から運び込み、それをまた同じ位の大きさのクレーンで移動させ、さび止めの加工をした後切断する。鋼材等の種類がたくさんあり、広い敷地に種類ごとにまとめて保管されていた。

切断作業は、機械が鋼材等を切断するが、最後は人の手で仕上げている。はじめは、数十キロ位の小さな部品だが、部品を組み立てて、五トンから二十トン位

のブロックとなる。工場の敷地には、五トン位のブロック、十トン位のブロック等、各段階のものが一定の距離をあけて置かれていた。ぼくは、バスの車窓から、見た目のサイズが段階を経るごとに大きくなっていく様子に、窓に顔を押し付けるように見入った。まるで、レゴブロックを巨大化させたようだった。

ぼくが特にすごいと思ったのは、船の「まげ」の部分は人の手で作業が行われていたことだった。それは、機械化できない重要なところだからだ。高温のバーナーで熱してから水で冷やす工程を何度も繰り返して、造っていた。二十メートル位離れたバスの車窓からでも、バーナーの火花や水で冷やしたときの水蒸気ももううと煙を上げて見えているのが見えた。

三つ目は、組立だ。二つ目の段階で用意した二十トン位のブロックを組立てて、百トンから百五十トンのブロックへと組立てる。組立工程には、溶接作業がある。単純作業のものは溶接ロボットが一部導入されて仕事をしていて、でも、船の底の部分など、微妙な曲線美を必要とする溶接は、溶接ロボットでは加工できない。ぼくは、バスの車窓から、熟練の技術者の人達が暑い中を真剣な眼差しで手がけているのを見た。

四つ目は、ブロックの艤装だ。またブロックの状態で、船の一部でしかないが、船の機能を満たすために、配管や電線管等のパイプを取り付ける工程だ。パイプ

の数には八千本位で、人間で例えると血管になる。機能を満たすための電線管は、人間で例えると神経だ。

この段階で、ブロック全体に塗装をする。なぜなら、ブロックのさびを防ぎ、完成して船が海を走るときに海水の抵抗が少なくなるからだ。ぼくはバスを降りて、ブロックの近くまで行くことができた。ものすごく大きくて、これが船のどこの部分になって組み立てられるのか、すぐにはわからなかった。とても複雑な形をしているが、すき間なくさび止めが塗られているのを見た。

五つ目は、ブロック搭載だ。船は、長さが四百メートル、幅が九十メートル、深さが十三メートルあるドックの中に、ブロックをクレーンで吊り下げて運び込み、船を、前、中央、後ろの三つに分けてそれぞれ組立てられる。この段階で使うクレーンは、今までの工程で鋼材等やブロックを運んでいたものとはサイズが違う。地上からの高さが七十五メートルある一番大きなクレーンだ。このクレーンは、赤と白を交互に塗ったもので、大きなブロックを工場敷地内からレール二本分をまたいで海の方にあるドックへ運ぶことができる。太い柱が二本あり、その二つの柱には長さ八十メートルから九十メートルの太くて長い鉄骨が横たわり、大きな橋のようだった。太くて長い鉄骨には、ブロックをつかんで運ぶためのつまみの付いた長さが二十メートル位のロープが二本ぶらさがっていて、風が

吹いても揺れないくらい太かった。

操縦席は、海側のドックの近くにある柱にあった。そこは、地上からの高さ六十五メートルあり、ブロックを移動するときに、下の作業や周りがよく見えるよう、足元も含めて全て透明になっていた。操縦席へ行くには、まず、ブロックが置かれている工場の広い敷地側の柱にあるエレベーターで高さ七十五メートルの橋の上へ上がり、そこから長さ八十メートルから九十メートルの橋を歩いて、作業が無事にできるか点検をしながら渡り、ドック側の柱の方へ着いたら、階段で十メートル位降りて、操縦席に入る。風の強い日は、橋を歩いて渡れないので作業できないと聞いたときは、ほっとした。地上から操縦席や橋の上を作業員が移動する様子を見たときは、心配でひやひやした。

大きなクレーンでブロックを運搬する説明を聞いたあと、いよいよドックで船の組み立てをする様子を見学した。ぼくが見学したときは、自動車運搬船を造っていた。まだ、船の外側の壁がすべてできていなかったので、船の中の様子を外から見ることもできた。

船の中はいくつものフロアに分かれていて、エレベーターもあった。自動車運搬船は、リモコンで、大型車や普通乗用車等の車種によってフロアの高さ調整をすることができるとの工夫もあることを知った。車の大きさによって運べる台数

は異なるが、五千台から七千台を一度に運ぶことができると教えてくれた。ぼくは、規模の大きさに驚いた。

ぼくが見学したのは、船の後ろの方だったので、船の下の方にあるプロペラを見ることのできた。大きさは、直径が六メートルあった。船の底は、赤い塗料で塗られていた。どうして赤い塗料なのかと質問すると、銅が入っているので、赤い色をしていると教えてくれた。そして、塗料も技術開発が進んでいて、藤壺がつきやすいという問題が昔からあったけれど、今では自然と藤壺が落ちるように塗料が開発されていて、つきにくくなっていること、藤壺がつきにくくなっていることで船の整備が容易になり、故障等も起きにくくなっていることを教えてくれた。

船の後ろ側の上の方を見上げると、船体に、IMO、七桁の数字、船の名前、「TOKYO」の文字があった。IMOは、国際規格を満たしていることの証明、七桁の数字は申請番号、船の名前は所有者が命名すること、「TOKYO」はこの船が主にごく中心に運行するかを表記していると教えてくれた。

新来島豊橋造船は、車の運搬船のほか、鉱石や石炭等を運ぶばら積み運搬船、コンテナ船、石油等を運ぶタンカー等も造っていた。

六つ目は、進水だ。船の組み立てができたなら、ドックの中に海水を入れて船を浮

かせる。ドックは、豊橋港のすぐ横にあり、人が手動でゲートを開けると、海水がドックへ流れ込む。ゲートの厚みは、ぼくの足でもまたげた。

この段階では、まだ船は走れないので、数隻のタグボートで船を引っ張り、ドックから船を出す。船の完成度からすると、約五十%だ。タグボートも近くに数隻係留されていた。一隻に四人乗れるくらいの大きさだった。それほど大きくないタグボート数隻で、こんなにも大きな船をドックから引っ張り出すことができるのか、と海水が船を浮かせる浮力の大きさや先人たちから受け継がれた造船技術のすごさに驚いた。

七つ目は、岸壁工事だ。タグボートで引っ張り出された船を岸壁に係留し、船内の内装を仕上げて、家具等の備品を備え付けし、電子機械等の点検や調整をする。ドックから岸壁へ移動する途中に、自販機が一つぽつんと置かれていた。この自販機は、暑くて広い工場内に置いてほしいとメーカーに要望して置いてもらったもので、設置以降毎年愛知県内で一番の販売額を誇っているそうだ。

八つ目は、海上試運転だ。船の注文主である所有者、新来島豊橋造船の技術者等船の性能に関わりのある全ての人が乗船し、厳密かつ慎重に、エンジンの性能や全ての装備等を確認し、最終的な総合運転をして設計通りの船が造られているか点検と確認をするため、駿河湾等で三泊四日の船旅をする。

九つ目は、無事に点検が終わり、設計通りに船が造られていたら、完成だ。船の所有者が船に名前をつけて、紅白の垂れ幕を飾り、支綱切断をして、シヤンパンとくす玉でお祝いをする。新来島豊橋造船で完成した船は、日本や世界の海を走るために旅立つ。

船を実際に造るのに一年半程かかるが、設計から完成までは、約三年から四年かかること、自動車運搬船のような大型の船は、一艘の購入代金が数億円から数百億円まであり、それは規模や構造等で異なると教えてくれた。

船の大きさ、運ぶ荷物の数や量、金額も時間等、どれも半端なくすごいと思った。ぼくが見学をしたときは、次の日に海上試運転している船が戻ってくることになっていた。そのため、無事に点検が終われば、命名式が行われるとして紅白の垂れ幕がかかった会場が準備されていた。

ぼくは、船には製造番号ではなく、名前をつけて、船体に表記し、祝い、登録をすることは、まるで人と同じだと思った。ぼくにとっては、船よりも車の方が身近な存在に感じるが、車は車種と製造番号のみで、一台ごとに名前を決めて登録する制度ではない。船に命名式があるのは、人にとって、車がでるずつと前から船が高価な特別な乗り物で、船を使って文化や産業を発展させてきた歴史があるからだろうと思った。

ぼくは、船の名前は、どのようにして決まるのかを質問した。

すると、船名は、船の所有者が、船の名前を登録してある国際機関に船の名前を申請し、同じ名前がない唯一無二のものであることを確認できてから決まると教えてくれた。同じ名前の船があると、トラブルが生じたとき等に特定できないので、問題を処理できない。そのため、既に同じ名前の船がある場合は、違う名前にならないと命名できないことが国際ルールで決まっていると教えてくれた。

ところで、日本の船には、最後に「丸」のつく名前が多い。興味を持ったぼくは、その理由を調べた。明治三十三年に制定された「船舶法取扱手続（明治三十三年通信省公達第三六三号）」では、「船舶の名称にはなるべくその末尾に丸の字を付せしむべし」とあり、二〇〇一年の訓令改正で条項が削除されるまでこの決まりがあったからだとわかった。

ぼくが見学したときの自動車運搬船には、「TOKYO」とあった。これは、東京湾を中心に運行するという意味で、所有者が日本を船の国籍として申請したからだと教えてくれた。船の国籍は、船の所有者が誰で、どの国に申請するかによって変わるから、日本の豊橋にある新来島豊橋造船で造った船だから全て自動的に日本国籍の船になるわけではなく、例えば、日本郵船の場合は、日本の会社が日本に登録を申請した船だから、国籍が日本になると教えてくれた。

ぼくは、日本国籍の船がどのくらいあるのかを調べてみた。公益財団法人日本海事センターのホームページには、二〇二二年のレポートを基に作成されたグラフがあった。全体の約五十六%がパナマ船籍で、日本国籍の船は約十二%で二番目に多かった。三番目は、リベリア船籍が七%、四番目はマースシャル諸島が五%、五番目はシンガポールが四%、その次はバハマと香港がほぼ三%だった。

パナマの国籍をもつ船が圧倒的に多い理由は、税金が安いだけでなく、船を保有した後のトラブル対処が迅速で、手続き等の電子化が進み、利便性が高いからだとあった。

そして、日本国籍の船は、船を所有したことを届け出すと登録免許税として二千二百万円程納め、毎年の固定資産税が約千百万円発生するが、パナマやリベリア、フランス、デンマークの国籍の船は、登録免許税も固定資産税も非課税とあった。船籍を登録する国が違っていると、納める税金の負担がこんなにも変わるのか、と驚いた。

ぼくは、船籍登録の多い国のことを調べた。

パナマは、北アメリカ大陸と南大陸の境に位置する国で、大西洋と太平洋を結ぶ重要な海上ルートとして世界的に有名なパナマ運河がある。パナマは、十九世紀初頭にスペインから独立するまでスペインの植民地だった。そして、独立後、

アメリカの支援を受けてパナマ運河を建設し、運河の通行料収入と金融業で成り立っている国だ。

リベリアは、西アフリカにあり、アメリカで解放された黒人奴隷によって建国され、一八四七年にできた国で、世界最貧国の一つだ。

マーシャル諸島は、太平洋上にある島国で、十七世紀にスペインの領有となつた後、十九世紀にドイツの植民地となり、第一次世界大戦で日本が占領して統治したが、太平洋戦争でアメリカに統治された。独立国家となったのは、一九九一年だ。漁業と観光業もあるが、主に金融業で成り立っている国だ。

シンガポールは、今のシンガポールとマレーシアの領土が十九世紀にイギリスの植民地となり、シンガポールの戦いの後、一九四五年までの三年間を日本に占領され、一九六三年にマレーシアとして独立し、そのうちの一州のシンガポール州が一九六五年に独立した。観光業もあるが、主に金融業の国だ。

バハマは、西インド諸島のバハマ諸島を領有する国で、イギリス連邦加盟国の一つだ。十七世紀にイギリスの植民地となり、十八世紀から十九世紀にスペインに占領されたが、その後イギリスが再び植民地化した後、一九七三年に独立した。観光業と金融業の国だ。

香港は、中国の特別行政区の一つで、観光業もあるが、金融業で発展してきた。

ぼくは、主に金融業で成り立つこれらの国に船籍を登録する理由に、何か特別な意味があると思つた。ぼくの中に、まるでブラックホールにすいこまれるような、何とも言えない不気味な違和感が渦をまいた。

さらに調べると、これらの国は、便宜置籍船（ベンギちせきせん）を誘致していることがわかつた。船の所有者は、自分の国籍が所在する国に船籍登録をするのがルールだ。しかし、外国国籍の船の所有者に船籍の登録を認めているパナマ等の国に便宜的に船籍を登録することが認められていて、これを便宜置籍船という。これは、船の所有者が、お金を出して、パナマ等の国に船を所有するためだけの実体のない会社（ペーパーカンパニー）をつくり、この実体のない会社が名目上の船の所有者として船籍を登録する方法だ。一九一〇年代にアメリカやスペインに船籍のある船の所有者が、税金の負担を減らすためにパナマに船籍登録をしたことに始まり、便宜置籍船の方法は今でも世界中で行われている。

船は、五年に一回、車検のように点検を受ける義務が法律で決められている。自動車運搬船のような大型船は、船一艘の点検費用が数百万円から数千万円位する。そのため、多くの場合、五年ごとの点検を繰り返す前に、買い替えられるそう。購入時とその後のお金が半端ないので、お金持ちじゃないと船を所有できない。船を所有する時や点検等に必要なお金は、所有者に平等に負担される

が、税金の負担は船籍がどこなので変わる。所有者が、税金の負担を減らすためにパナマ等の船籍を取得していることの裏付けが統計資料のデータだったわけだ。この事実を知ったぼくは、愕然とした。これは、「タックス・ヘイブン」といい、国際的に深刻な問題として警鐘されている。便宜置籍船は、便宜的に船籍を置いた国の旗を付けて運航され、実質的な船の所有者の国の旗を付けない。つまり、実質的な船の所有者の国の法規制が、便宜置籍船には通用しない。例えば、国際漁業協定に加盟していない国の便宜置籍船の船は、捕鯨規制対象にならない。「タックス・ヘイブン」は、様々な法律の規制のすき間を抜けて、税金だけでなく、貿易、漁業等の国際的な問題を引き起こしている。

ぼくたちにとって、船の存在の重要性は変わらない。貿易がぼくたちの暮らしを支え、船が貿易を支えている。税金の負担が大きく変わる「タックス・ヘイブン」の存在が、貿易等をゆがめ、ぼくたちの暮らしに影響を与えている。ぼくたちは、「タックス・ヘイブン」の存在や実態を知り、与えている影響、問題等を理解しなければいけない。

あなをなくす

えひめだいがくきよひくがくぶふでしやうがここう にねん
愛媛大学教育学部附属小学校 二年
わか ぞう
若狭 早

海にもぐると、お魚がいた。いきおいよく手を出したら、少しだけお魚のせなかにさわる事ができた。

「やったー！」

ビビンッ。海のすなとはちがう手ざわり。なんだかおもたような、ツルツルとしたふしぎなかんじ。つかまえることはできなかつたけれど、たしかにぼくの手が当たったのだ。

夏の海のできごとを、ぼくは今もはっきりおぼえている。

もっとたくさん海でおよげるようになりたいから、ぼくは水泳教室に通っている。三才からならいはじめて、今は三きゆうだ。

この前、ずつとつかっていた水着に小さなあながあいてしまった。そう言えば、さいきん少しきつくなつた気がしていた。

「来週、お家の人に新しい水着を買ってもらつてね。」

あなに気づいたコーチがやさしく言ってくれた。太ももの内がわ、ほかの子からはよく見えない場所だったので、その日はそのまま泳いだ。

お家に帰つてから、お母さんに水着のあなのことを教えると、

「四年もつかつたからね。来週、うけつけで新しい水着を買おうね。」
と言ってくれた。ただ、その後すぐ、

「あ、そろそろうち合わせの時間！」

いそいでパソコンのセッティングに入ってしまった。

さいきん、お母さんはいそがしそう。もうすぐ大きなイベントがあるから、パソコンをつないでうち合わせする回数がふえた。大人はなかなかたいへんみたい。

ぼくはごはんを食べながら、新しい水着のサイズは何になるのかな、と考えた。

一週間たち、水泳教室の日がやってきた。いつもはお母さんと自でん車で通っているけれど、今日はお父さんが車でおくってくれた。いそがしいお母さんとうたいまするため、お父さんが早く帰ってきてくれたからだ。

ひさびさに車にのれたのがうれしくて、ぼくは水着のあなのことをすっかりわすれてしまった。お父さんとバイバイして、こうい室で水着をはくと……。

ピリ、ピリリ。太ももの内がわからおしりのわれ目まで、一気にあなが広がった。もうピリピリのボロボロだ。

これはいけない。コーチにおねがいしてすぐ水着をかしてもらい、なんとか泳ぐことはできた。

お家に帰り、おしごとがおわつたお母さんにボロボロの水着を見せるとおどろいていた。

「いめんない、来週こそ買うからね！」

お母さんもわすれていたなんて、めずらしい。それだけいそがしかったみたいだ。

お母さんは家ぞくのよよいひように「スクール水着！」を入れ、つぎはわすれないうようにしてくれた。

その後、新しく買ってもらつたのは「一四〇サイズ」の水着。おなかもおしりも

きつくない。今ならついている平泳ぎも、前より上手に泳げるようになった気がする。

海で泳ぐ時はお父さんとおそろいの水着をはいている。白と水色のグラデーションで大きめのポケットつき、けっこうおしゃれた。さいしょに大きめの「一三〇サイズ」を買ってもらっていたので、まだまだはける。もしお魚をつかまえたなら、ぼくのポケットに入れてみたい。

今年の夏休み、おしゃれ水着でスライダーつきプールにも行った。くりかえしスライダーにのついていると……。

「あながあいちゃった!」

ぼくの水着じゃなくて、お父さんの水着だった。スライダーとの「まさつ」でやぶられてしまったのだ。親子で水着にあながあくなんて。それでも、お父さんのあなの方が小さかった。

「これなら直せそう。」

お家でおせんたくをしてから、お母さんがミシンでふさいでくれた。これでまた海で泳いでもだいじょうぶ。あなをほったらかしにすると大きくやぶれて、クラゲが入ってしまうかもしれない。おしりをさされてしまったらいちぢだ。

海では水着だけでなく、ラッシュガードも着るようにしている。クラゲにさされ

ないため、そして「し外線」から体をまもるため。ぼくは近づかないようにしているけれど、ゴツゴツした岩場でも、ラッシュガードがすりきずたいさくになる。

海で楽しくあそぶためには、あんぜんに気をくぼるひつようがある。それは海上ほあんちようの人たちが教えてくれた。

八月十三日、ぼくは松山海上ほあん部のじゅんし船「いよ」の見学をさせてもらった。じゅんし船の一番前から、そうがんきようでせと内海を見た。よく晴れていて、なみもおだやか。だからと言ってゆだんしてはいけないそうだ。

松山海上ほあん部長の黒川さんは、

「海でじこがおきた時、さいがいがおきた時、いのちをかけて海のおんぜんをまもるのが、海上ほあんちようのしごとです。」

と、話してくれた。パリッとしたせいふく、キラキラもようが入ったぼうし。もちろんなんてあいていなくて、かっこよかった。じゅんし船にのる人は当番せいで、いつでもしゆつどうでできるようにしていた。

じこをふせぐため、ふくそうに気をつけること。海であそぶ人だけではなく、つりをする人もライフジャケットが大切。ぼくは、

「上手に泳げたら、もうだいじょうぶ。」

とおも
思っていた。それではいけないのだ。水着みずぎにラッシュガード、そしてライフジャ
ケット。海うみあそびのじゅんぴに、あながないように。



ぼくの地引網

ふなばしりつたきのいしょうがっこうごねん
船橋市立田喜野井小学校 五年

田中 佑築

今年も海に来た。なぜかというと、地引網をしに来たからだ。
ぼくは車の中で、窓を少し開けて、浜に置かれたあの大きな網を見るのを楽しみにしていた。

みんな車の中で、日焼け止めというやつを体中のそこらへんにベタベタ塗っていた。家族の中で、ぼくだけ塗らなかった。なぜなら、日焼け止めを塗るのはめんどろだし、どうせ新しい皮ができると思ったからだ。そういえば、テレビで日光に当

たらなくなつて体で作られるビタミンが少なくなる、という話をしていた。でも、正直そのときのぼくは、あまり気にしていなかった。

「海に着いた！」
と大声で言つて車から出ると、日差しがキラキラしていて、今年も異常に暑かった。裸足で走り出してみたが、地面が熱すぎてすぐに車へ戻った。足の裏は真っ赤で、ここなら卵焼きが作れそうだと思つた。しかたなくビーチサンダルをはいて、もう一度外へ出た。

「バシャーーン！」
と、海から大きな音が聞こえた。ぼくは行きたくてたまらず、お父さんに許可をもらつて、青くてきれいな海に向かって全力で走り出した。

海に入ると、すぐにビーチサンダルを脱いだ。あんなに日差しが強くて熱いのには、海はそれを無視するほど冷たかった。その冷たさが足から体の中に一気に広がって、気持ちよくてたまらなかつた。波が来るたび、ぼくはタイミングを見てジャンプした。ドン、と足に波が当たり、体が少し浮く。その感覚が楽しくて、何回もくり返した。ふと横を見ると、弟がいた。去年は、海や波を怖がり、お母さんの手をぎゅつと

握りしめ、今にも泣きそうな顔で浜に立っていた弟だ。去年の弟は、最初は少し離れたところに立ち、波が来るたびに一歩下がっていた。ぼくの方をちらちら見て、どうしようか考えているようだった。

でも、今年は違った。弟は、自分から一歩、また一歩と海に近づいていった。波が足に当たると、びっくりしたように声を出したが、すぐに笑った。そして、また前に進んだ。弟は裸足だった、地面がこんなに熱いのにと、びっくりした。

「あちちちちー！」

と言いながらも足を止めず、ついに波の中へ飛び込んだ。その瞬間、ぼくは少し驚いた。去年の弟なら、絶対にやらなかったからだ。弟は波に押されてよろけながらも、転ばないように必死で立ち、波が引くと、また前に進んだ。顔はニコニコしていて、怖がっている様子はなかった。その姿を見て、ぼくは、弟の体だけじゃなく、心も大きくなったんだなと思った。

弟はすぐに、ぼくに向かって水をかけてきた。ぼくは笑いながら、その三倍くらいの勢いで水をかけ返した。弟はさらに水をかけてきて、二人で何度もかけ合った。そんなふうには海で遊んでいると、放送が流れた。

「地引網の時間です」

ぼくは声に出しながら、網の方へ猛ダッシュした。網のところに着き、ぎゅつと

握って、みんなと一緒に引き始めた。ぼくは一〇〇%の力で網を引いた。

網がだいぶ近づくと、たくさんの黒いものが飛んできた。そこらへんには、海鳥が何十羽もいた。こんなに近くで、こんなにたくさんの海鳥を見るのは初めてだった。思っていたよりもずっと大きく、翼を一生懸命ばたばたと上下させて、空中にとどまろうとしていた。そのたびに、白い羽があたりにふわっと落ちていった。

海鳥は、魚を取ろうとして必死だった。浜に着地しては魚を追いかけ、また飛び立つ。その動きから、魚が本当に大好きなんだということが伝わってきた。でも、ぼくには、ただ必死なだけじゃなく、魚をほしくておねだりしている、少し甘いんぼうの鳥にも見えた。

すると、お母さんが言った。

「海鳥に魚を投げてみたら？ きつと食べてくれるよ」

ぼくは最初、そんな反射神経がいいわけがないと思った。でも、よく考えてみると、海鳥は人間が引く網を見て集まってきた。つまり、人の動きを読んでいる。そう思うと、海鳥は思っていたよりずっと頭がいいのかもしれないと思った。ぼくは海鳥を見直した。そして、それは名案だと思った。

生ぐさくて、ぬめぬめした魚をつかみ、海鳥の大群の真ん中をねらって、思いきり投げた。一回目は失敗だった。誰も見向きもしない。魚は空しく海へ落ち、ぶか

ぶか浮くだけだった。

それでも、海鳥は魚が落ちたことに気づき、すぐに下へ降りていった。その様子を見て、ぼくは「次はいける」と思った。

もう一度投げる。すると、投げたイワシを見て、海鳥が大きく口を開けた。黄色いくちばしの中に、イワシがすっぽりおさまった。その瞬間、ぼくは両手を思いきり上げて、親のところへ走った。海鳥は口を閉じ、魚を飲み込むと、

「シャーー！」

と鳴いた。それはまるで、ペットがえさを食べて、お礼を言ってくれたように聞こえた。ぼくはうれしくて、今すぐ海鳥と握手をしたくなった。でも、そんなことはできない。それでも、ぼくの「ありがとう」は、ちゃんと伝わった気がした。胸がじんわり熱くなった。「もう一丁投げるからな！」ぼくは、もう一度あのかわいい声を聞きたくて、また魚を投げた。

海鳥が食べるたびに、ぼくは大はしゃぎだった。まるで、ぼくのほうぐえさをもらっているみたいな気分だった。

弟も楽しそうに寄ってきた。魚をつかもうとするけれど、つるつるして、なかなかつかめない。それでもあきらめず、ついに魚をキャッチして投げると、海鳥が食べしてくれた。

弟はうれしそうに、何度も魚を投げていた。魚が嫌いだっただけの弟が、なぜ投げられたのか、不思議に思った。でも、弟が魚を投げる姿を見て、ぼくは、弟と同じ海を見ている気がした。

その後、漁師さんが魚の選別を始めた。必要なものと、必要でないものがあるらしい。必要でないものは浜に投げられていて、その中には大きなサバもあった。お父さんが、「取りに行け！」と言った。ぼくはフリスビーを投げられた犬のように走ったが、一つも取れなかった。それでもがんばっていると、家族の近くにサバが飛んできた。落ちた瞬間、地面が揺れた気がした。こんなに重いものを遠くまで投げる漁師さんは、すごいと思っただ。

家に帰ると、魚は二百八十四匹もあった。臭くて気持ち悪かったが、数えるうちにだんだん楽しくなった。夕方まで魚をさばき、次の日、唐揚げにして食べた。見た目はぐちゃぐちゃだったけれど、味はとてもおいしかった。

ぼくは、海鳥に魚を投げた瞬間や、全力で綱を引いた感触を思い出しながら、その魚を食べた。

またウミガメに会うために

江東区立豊洲北小学校二年 になん

おお みや なら な
大宮 来奈

わたしは、夏休みに宮古じまに家ぞくりよ行をしました。そこで生まれてはじめてシュノーケリングを体けんしました。シュノーケリングをした時に色いろな生きものがたく山いたけれど、わたしが一番心にのこったのはウミガメです。ゆうゆうとおよいでいるすがたを見て「すてきだな。」と思ったからです。海のそこにいるウミガメがきゆうに海めんへのぼってきました。わたしはそのことがとてもふしぎ

に思いました。その後かかりのお兄さんが「ウミガメはきゆうをするために海めんに上がってくるんだよ。」と言ったのを聞いてとてもおどろきました。なぜならウミガメは魚みたいにならずと水中にもぐっていられると思っていたからです。その後ウミガメについて知りたいことがたく山頭にうかび上がってきました。

「ウミガメのきゆうはどれぐらいものかな。」「ウミガメとリクガメのちがいはおよげる、およげないのほかに何かあるのかな。」「ウミガメはそもそもどうやって子そんをのこしてきたのかな。」という三つのことについてです。

宮古じまから帰った後に図書かんでシュノーケリングの時に知りたかったことを三さつの本をかりて調べました。さい初はウミガメのきゆうについてです。ふつうは二十分ぐらいできゆうをしに海めんに上がってくるけれど本当は数時間もつそうです。水中にもぐれる時間は人間とちがってとても長いな、とおどろきました。つぎにしらべたのはリクガメとウミガメのちがいです。ウミガメのこうらは水のでいこうを少なくしてスイスイおよげるようにリクガメよりひらべたくなっていることがわかりました。海をおよぐウミガメにびつたりの体になるように今までしかかしてつづけてきて今の体があるんだなと思えました。さい後にしらべたのはウミガメはどうやって子そんをのこしているかです。ウミガメはちゆうるいだからたまごから生まれてそだっていきます。そしてたまごから生まれてすなはまから海に

行っておよぐ時とてもきけんな目にあいます。海にただようポリぶくろをえさのくらげとまちがえてのみこんでしまったり、何かのはへんが体にささってしまつてけがをしてしまうことがあります。大きな魚にのみこまれてしまつたり海に行くと中に鳥につれさられてしまうこともあわせてウミガメは千ひきに一びきぐらいしか大人になれません。だからぜつめつが近づいてきています。ウミガメについてたく山のつらいニュースをしり、とてもかなしい気もちになりました。かりた本にもウミガメをまもろうと書いてあつたけれど、どうしてまもらないといけないのかなとも思いました。たしかにウミガメがぜつめつすることはとてもかなしいけれど、ウミガメがいなくなつてしまうことはちきゅうにかかわることでもなさそうな気がしていました。けれど本を読んでウミガメは海のあるぜんをまもつてくれている大じなそんざいということがわかりました。くわしくいうとウミガメは海のそこに広がるかいそうをいじしています。かいそうは海の上にまんべんなく広がっていなくてはなりません。そのほかにもウミガメがさんらんした時にふかしきれなかつたまごはすなはまのしょくぶつのせい長をたすけてその上げんこうもたもっています。だから海のけんこうをいじするためにはウミガメはとても大切なそんざいです。つぎにシュノーケリングでウミガメを見る時は今回みたいに「かわいいな」「すてきだな。」以外にもちがうしてんで見れる気がします。これからは海もウミガメ

も魚もみんなまもつていけるようにしたいです。そのためにもつといろいろな海のことを学びたいです。すてきな海のかんきようをまもれるようにわたしにできることを考えて行どうにうつしていききたいです。

豊かな海をつくるために

伊丹市立荻野小学校六年

木元 孝亮

毎年春になると神戸に住むおばあちゃんがイカナゴのくぎ煮を作ってくれます。ここ数年、兵庫県内のイカナゴの漁獲量が減っています。二〇二五年、店頭値段が一キロ一万円を超えたというニュースを見て三十年前の十倍以上の値段になったと、おばあちゃんが言っていました。不漁の原因は、海の水温が上がって、イカナゴを食べる天敵・ハマチやサワラが増えていることや、魚の成長に必要な海の栄養塩が減っていることだと言われています。

詳しく調べてみると、兵庫県の海は昔に比べてイカナゴや明石沖のマダコなどが

住みにくい環境になっているそうです。兵庫県や明石市、さまざまな団体の人たちが、海の資源を再生するため、豊かな海づくり活動を行っていることを知りました。

豊かな海を取り戻す取り組みのひとつである、ため池の底にたまっていた栄養たっぷりの泥を海に流す「かいぼり」について興味が湧きました。実際に見てみたいと思いついて二〇二五年二月八日に明石市大久保町松陰の下川池で里・海協働活動として実施された「かいぼり」を見学しました。下川池では冬場の海の栄養塩不足の解消、養殖ノリの色落ちやイカナゴの不漁対策として、この時期に漁業関係の人たちと、農業関係の人たちが連携して、栄養分を含んだ泥をかき出して海へ流しているそうです。

その日、家から車で明石市の下川池に向かう途中、ラジオから強烈な寒気の影響で、日本海側で記録的な大雪、太平洋側も平地で積雪の所があると聞きました。

下川池に着くと快晴でしたが、吹きさらしのため池の提防は、寒くてもう震えが止まりませんでした。とても寒い日でしたが、たくさんの方が集まっていました。池の周辺では明石のりやキャベツやブロッコリー、じゃがいもなど野菜を売っている人がいて賑わっていました。

下川池の水面は氷が張っていました。池の水は半分以上抜かれています。池の底の方に行ったら、干からびた池の底が見えました。池の底に行って提防を見上

げると、明石浦、林崎、江井ヶ島、東二見、西二見、五漁協ののぼり旗が勇ましくはためいていました。今まで見たことがない池の底からの景色に感動しました。

数メートル先では、胴まである長靴を履いた人が氷の張った池に腰までつかっていました。スコップのような道具を手にして、氷を割って池の底にたまった腐葉土をかき出していました。海の栄養分となるチッ素やリンが含まれていて、豊かな海づくりの手段として注目されています。

そのあと消防ポンプを使って放水して池の水をかき回し、近くの川に押し流していました。ため池の栄養分を含んだ水が海に流れることで、栄養がめぐる海になると思うと不思議な気持ちになりました。

豊かな海を取り戻す取り組みについて、ますます知りたくなったので後日、明石市役所に行きました。環境産業局の豊かな海づくり課の中島さんにお話をうかがいました。

明石・瀬戸内海の歴史として、約四十年前は栄養塩が多すぎて、海が汚れていたそうです。今は海がきれいになったことで栄養塩が少なくなった結果、海の栄養が足りなくなつて、魚のエサとなるプランクトンが減り、魚が住みにくい環境になっているそうです。

豊かな海を取り戻す取り組みについて、ため池の「かいぼり」以外にも、施肥（せ

ひ）と言つて海の栄養塩の元になるチッ素やリンを含んだ肥料を海にまいて、海の生産力回復をめざす取り組み、海をたがやして、栄養塩を海中に掘り起こす「海底こううん」という取り組みなどを教えてもらいました。

興味深かったのは、下水処理場の栄養塩管理運転です。チッ素とリンは家庭や工場からの汚水・排水に多く含まれているそうです。法律の基準を守りながら、明石市内の浄化センターの排水に含まれているチッ素の量を増やして放流する取り組みに驚きました。他にも自力で生きられる程度に稚魚を育て、海に放流する栽培漁業などのお話をうかがいました。

海の資源を再生するためのさまざまな取り組みについて、中島さんのお話をお聞きしてとても理解が深まりました。

豊かな海を取り戻す取り組みが、実を結べばイカナゴの漁獲量も増えて、昔のようにお手頃な値段で買えるときが戻ってくるかもしれない。

大好きなイカナゴのくぎ煮がたくさん食べられるようになる日まで、豊かな海づくりの活動を見守り続けたいと思います。

〈中学生の部〉
ちゅうがくせいぶ



海が教室になった日

昇陽中学校二年
安永 護

小学校2年生のある日、私は突然学校に行けなくなりしました。自分でも何で行けないかわからなくて、先生や親にどんなにサポートしてもらっても学校に行くことはできなくなりました。海はおろか、陸も空も遠い存在のように感じていました。みんなが当たり前のように学校に行けるのに、私は行けない。自分のことが自分でもいやになり、自分を責めて頭を殴ってみたり、自分に怒ってみたりしてみなければ、体は言うことをききませんでした。いつしか罪悪感にさいなまれ、昼夜逆転になることで現実から逃げていました。学校から遠ざかった私は、「勉強」や「将来」

という言葉が大嫌いになりました。

そんなある日、母が近所で開催されている理科実験教室の塾を見つけてきました。私は工作が保育園のころから大好きで、紙やブロック、モーター、電池などを使って様々な物を作っていました。自宅で勉強もしなくなった私のことを心配した母は、せめて好きなことだけでもと思って探したそうです。私が興味をもち参加を希望したため、母は塾の先生に私のことを話して受け入れ可能かと問い合わせました。不登校で学校に全く行けていないこと、昼夜逆転であること、発達障害と診断されており支援学級に在籍していること。塾の先生は、本人にやる気があれば大丈夫ですと言ってくださり、塾に通うことになりました。

その塾は、大阪の本部校だけでなく、小豆島に合宿所を持っていました。小豆島にある「星くずの村実験学校」です。私が初めて海と深くつながった場所でした。

三宮フェリーターミナルからジャンボフェリーに乗り、小豆島へ向かう中、塾の先生は遊びながら勉強できるように様々なカードゲームやボードゲームを用意していました。楽しみながら私はそこで、算数や国語、思考力を学ぶことができました。そうやって遊んでいく中で、自然と参加者と話をすることができるようになりました。塾の先生は、塾の卒業生が大学生の講師として参加しており、常に参加者全員のことを気にかけてくれました。自分が不登校でも特別扱いせず、他の参加者と同

じように接してくれることがうれしかったです。

そうやって何度も参加するようになりました。三宮から汽笛を鳴らして船が出航する様子がある日ふと見ていると、船で働く船員さんの姿が目には焼き付きました。ロープを外し、船が岸を離れる。エンジンの振動とともに大海原に旅立っていく中、あわただしく動く船員さんたちがかっこよく見えました。甲板に出て、潮のにおいと風の音が、私の心をほどいていくような気がしました。

実験学校では、教室だけでなく、自然もまた勉強場所でした。小豆島の海岸で魚や海の生き物を観察する中で、沖や砂浜にどんな生物がいるのか少しずつ覚えていきました。夜には星や惑星を天体望遠鏡で観察し、星座を覚えていきました。理科実験では、火を使う実験、太陽光を使う実験、薬品を使う実験、落ち葉や自然を使った工作、ロボット作り、様々なことを学び、失敗しながら自分でやりました。机にじっと座っていることが苦手だった私でも、ここでは自然と集中できました。

中でも忘れられないのが、釣りとの出会いです。朝7時に起きて港へ向かい、海辺でご飯を食べてから釣りをするので、釣りをしたことがなかった私は、サビキ釣りを教えてもらい、竿の持ち方、餌の入れ方、アタリと誘い方などを学びました。魚がはじめてかかった瞬間の手ごたえは、今でも忘れられません。釣れると思ったけれど、あっさり逃げられ軽くなった釣り竿に、心を躍らせました。自分の力で海

とつながった気がしました。何度も挑戦するうちに、釣りは私の大切な楽しみになりました。

実験学校をきっかけに、小学校には時々登校できるようになりました。校長先生と将棋をしたり、教頭先生に勉強を教えてもらったり、支援学級で秘密基地を作ったりしました。今になって思うと、小学校の先生方は私が登校しやすいように様々な工夫をしてくれていました。

学校の教室には行けないけれど、実験学校では学ぶことができました。「できない自分」ではなく、「できる自分」を感じられる場所になりました。

小学校6年生になり、中学校に進学しないといけないのに、中学校に行きたくない自分がいました。私の姉も小学校は不登校でしたが、少人数で不登校経験のある子どもでも受け入れてくれる私立中学校を受験し、少しずつ登校できるようになっていたのです、自分も私立中学校に行きたくなりました。学校説明会に参加し、自分のことをありのままに話し、それでも受け入れ可能な学校を受験することにしました。塾の先生たちは応援してくれ、そのおかげで無事今の学校に入学することができました。

中学校からはちゃんと登校しようとして決めて入学したのに、学校に通うことは今でも簡単なことではありません。それでも、小学校の頃にはいなかった友達が中学校

ではできました。学校に久しぶりに登校しても、自然に受け入れてくれ、声をかけてくれます。さりげなくメールで学校の様子や準備物、行事を教えてください。助かっていきます。行事にしか行けなくてもクラスメイトはそのことを気にもしないです。先生方も毎回よく来たと言ってくれて来てよかったと思えます。少しずつですが、小学校の頃よりは登校できるようになり、世界は広がっています。小豆島に通ううちに、私は船そのものに興味を持つようになりました。どうして鉄の塊が海を進めるのか、エンジンやモーターはどうなっているのか、エネルギーはどうやっていっているのか、整備はどうやっていっているのか、どれだけの人が船で働いているのか。考えるほどいろいろなことを知りたくなり、気が付けば自分で調べようになりました。

そんな中、商船高専や海洋高校という学校があるということを知りました。今年度はいくつもの学校のオープンキャンパスに参加しました。その中で船舶機関士という仕事を知り、「これだ」と直感しました。海のそばで、船を支える仕事をしたいと心から思うようになりました。

オープンキャンパスで学生の方々と話すことができました。釣り好きな生徒もたくさんいること、海の生物を育てている学科や部活があること、いろいろなことを聞くうちにますます進学したいと思うようになりました。

自然と海は私を変えてくれました。学校という形にはなじめなくても、学ぶ道は一つではないと教えてくれました。小豆島で様々なことを教えてくれた塾の先生に気持ちを伝えると、応援してくれました。いつかジャンボフェリーの船員さんになれたらと夢を持つようになりました。これからも、海と関わりながら生きていきたい。自分を救ってくれたこの海のおかげで、働き続けることが私の夢です。

魚の命と父への感謝

ながよちようりつながよちゆうがっこう
長与町立長与中学校二年

柿本 杏奈

私の父は釣りが大好きだ。家に釣り道具をたくさん並べ、宝物のように保存している。

海へ釣りに出掛けては魚を釣ってきて、捌いてくれた魚を夕ご飯で食べることがルーティンだった。わたしはその時正直魚より肉などが好物だったので、魚の良さがあまりわからなかった。

そんな父がある日、「いつしよに釣りにいかないか」と私を誘ってきた。内心ちよつとめんどくさいなと思いつつも楽しそうにしている父に向かって行きたくないとは

言えずに、ついていくことになった。父が連れていってくれたのは、海にまっすぐ伸びている防波堤だった。ついた途端に海特有の潮の香りがして、鼻がツンとして海に来たことを実感した。

父が言うには釣りというものは釣る場所がとにかく大事なんだそう。父は、海の様子をじっと見て、釣る場所を決めたのか、道具を出し始めた。私にも子供用の普通のより、軽くて小さい釣竿を手渡してくれた。次に父が取り出したものを見て私は思わず固まってしまった。父が取り出したものは、釣り餌に使うワームというミミズのような人工の餌だった。私の中で、釣りは小魚の模型みたいなものを使うイメージだったので、生きている、しかもミミズのようなものを使うとはあまりにも想定外だったのでびっくりしてしまった。私は恐る恐るうねうねと動いているワームをつまみ針に刺し、防波堤の上に座って釣り糸をそおつと海へと垂らした。実は私は釣りはこれが初めてだったので何が釣れるんだろうとドキドキしていた。じっと水面を見ながら父と私の間に沈黙が流れた。約三十分くらいそうしていても水面の変化はなし。だんだん岩の上に座っているお尻が痛くなってきた。じっとしていることに耐えられなくなり私は父の方を見た。父はなんとも言えない穏やかな表情でじっと水面を見ていた。私はもう一度水面に視線を戻し、じっと見たが何もなかった。父に「魚いなさそうじゃない」と尋ねると「釣りつてのは忍耐力がある

んだよ。もう少しまってごらん」と笑って言われた。その直後私の釣竿が反応し始めた。動く釣り糸にビクリして思わず釣竿を放しそうになったが、父の「落ち着いて、竿をしっかりと持って引き上げるんだ。」と言う言葉に私は落ち着きを取り戻して父に手伝わってもらいながら、釣り糸を引き上げるとキラキラ光る小さな魚が上がってきた。

「きれい」と思わず呟くと「これはキスという魚だね」と父が言った。私はとつたキスを見つめながら取れた達成感と嬉しき、高揚感が湧き上がってくるのを感じていた。そして私たちはその勢いのままキスを二十四ほどとつたとき、父が道具を片付け始めた。

私は父に「今たくさん取れているんだからもっと取れるよ」といって釣りを再開しようとした時、父がそれを止めた。そして一言「魚の命を頂いているんだ。命を軽く見てはいけない。」と言った。

私はその言葉を聞き、自分が命をたくさん頂いたにも関わらず、もつと取るうとしていたことに気づいた。そんな自分が恥ずかしくなり、魚にも餌になってくれたワームにも申し訳なくなつて私は父と一緒に道具を片付け始めた。片付けが終わる、私たちは再び車に乗り込み、家へまっすぐ帰宅した。家に帰ると父は外にでて釣ったキスを取り出し、包丁を押し当てて魚を擦り始めた。「何しているの」と尋ねる

と「魚のウロコをとっているんだよ。ウロコをとつた方が美味しく食べられる」と教えてくれた。魚を釣って食べるときはすぐ食べられるのではなく手間がかかるんだな。と思い父の作業を見ていた。それからキッチンでキスを調理することになった。父が「今日は天ぷらにしようか」と嬉しそうに言った。それから調理が始まった。父が魚を包丁で開く係で、私が油で揚げる係になった。母も油が危ないからといって揚げるのを手伝ってくれた。魚に衣をつけカラッと揚げるとたちまち美味しそうな匂いがしてきた。その匂いにつられて、おばあちゃんやおじいちゃん、弟がキッチンに集まってきた。気づけば家族みんなでお皿を出したり、付け合わせの野菜を切ったり、盛り付けたりしながら食卓に料理が並べられていった。みんなでワイワイ料理をする時間はとても楽しかった。そして完成した料理を前にみんなで手を合わせていただきました。

私はその時父の「魚の命を頂いているんだ。命を軽く見てはいけない」と言う言葉を思い出し、魚の命や感謝の気持ちをごめいいつもより長めに手を合わせて「いただきます」と言った。サクッと一口天ぷらを食べると旨みが溢れ出し、身はほろほろと崩れるようにやわらかく、今まで食べたどの魚よりもこの天ぷらが美味しく感じられた。周りを見ると家族が口々に「これはうまい」と笑顔になり、私と父にお礼を言ってくれた。それを聞いて私は温かい気持ちになった。

今まで食べた魚より格段に美味しいのは、家族の笑顔があるからか、自分で釣って揚げて食べたからか、魚の命に感謝しているからなのか。私はこの全てがこの天ぷらをさらに美味しくしていると思っただけ。それに気づいたとき魚がもつと好きになった。私は、これからも魚の命に感謝をしながら魚の命をいただこうと思う。そうすることが私にできる魚へのお礼だと思っただけ。私の魚の命への、気づかせてくれた父への、それから釣りへの感謝の気持ちが生まれた一日だった。

進化の証

ながよちようりつながよちゆうがっこう
長与町立長与中学校二年

にしだ なほ
西田名穂

ちゅうがくせい ぶ
中学生の部 88

私の家はよく家族全員で魚釣りに行きます。私も小さい頃から一緒にいろんな魚を釣って見てきました。けれどずっと魚と触れ合ってきた私ですが、実は中学一年生の頃まで魚を直接触ることができませんでした。自分で釣竿を使って餌をつけて海に投げて、魚を取るという動作まではできますが、いつまで経っても魚の体に触れて針を取ることがどうしてもできません。それは、海も汚いし魚によくない雑菌がついていそうだからというのかもしれませんが、一番は魚の鱗のヌメヌメとした嫌な感触です。一度触ったら、除菌シートで拭いても感触が残るし、ずっと

手が臭くなって何も触りたくなってしまうような魚の人間に対する最後の反抗なのかというぐらい厄介だなと感じていました。

けれど、私はあるきっかけにより、今までのような魚に対する気持ち悪いという印象が大きく変化しました。そのきっかけとなったのは、中学一年の夏休みのことです。

その日は、朝から満潮の時間を狙って三重の漁港に釣りに行きました。満潮だったためか、開始早々鯔がどんどん釣れました。釣竿の数が少ないため私はずっと魚を針から外さなければなりませんでしたが、私は本当に触りたくなくて、「やって」と言われても妹に全て任せて私は餌をせつせと作って、針外しから逃げていました。けれど、連続で釣れてしまうため、私も渋々しなければならぬ時があり、最悪な気分針をとっていました。魚に触れることが嫌という気持ち顔が出ていたせいか、母から「そんな嫌な顔をしなさい。魚だって生きてるんだから。」と言われ、私は嫌な顔をするなということは分かりましたが、「魚だって生きてるんだから」という意味を当時の私は「当たり前じゃん」と右から左で本当の意味を理解しようとしませんでした。

ですが、釣りに行ってから数日経ったある日、料理番組を見てみると、ふと母の言葉を思い出しました。何故思い出したかは謎ですが、その言葉の意味を考えてい

ると、推理小説の探偵並みの速さで「あのヌメヌメって実は大切な役割があるので
は？」という疑問が出てきました。

そう考えた私は、さっそく夏休みで暇になった時間を使い魚の体の仕組みにつ
いて調べました。すると気になる記事を見つけました。その記事に魚のヌメヌメは
“水中生活に適應するための進化の証”と書いてあり私は、あのヌメヌメはそんな
に重要なものなのかと余計に興味が出てきてもっと調べてみると、色々なことが
わかりました。ヌメヌメは粘液と呼ばれ、水中の菌から魚を守ったり、水との摩擦
を減らし、スムーズに泳げるようにするなどの役割があったり。また、その粘液の
量も魚の種類によって異なり、鱗が少ない魚ほど表面の粘液の量が多くなるとか。
などなどさまざま知識を知ることができました。知識を知った上で、私の頭に
釣った鱈は結構鱗あつたからあれより鱗が少ないやつほどのくらい粘液があるんだ
ろう。と新たな疑問が出ましたが、粘液の量など私には調べる勇氣はありませんで
した。

調べていけばいくほど、今まで魚に対するマイナスイメージがどんどん変わって
いき、今まで誤解していた魚に申し訳なかつたなと思いました。

魚について調べた日から、私は魚に対する気持ち悪いと思うことは減り、中学
二年生の今では好んではしませんが魚に触れることができるようになりました。

人間から見ると気持ち悪いなと思うことでも、魚達からしてみれば生きるために
必要不可欠のような大切なものだったり、歴史を辿っていけばそれは、昔から進化
してきたという証になるようなすごいものだったりします。

表面的にはわからないようなことでも、興味を持って調べればいろんな知らない
世界を見つけることができるかもしれませぬ。

ソーシャルメディアが変える海の姿

みさき

「この海、きれいだな」と思った次の瞬間、指は無意識にスワイプしていた。30秒の動画のうち、実際に見ていたのは10秒程度だったにもかかわらず。毎日SNSを利用してはいるが、そこで目にするアニメや動画の内容を、ほとんど覚えていない。「これは面白い」「知らなかった」と感じて、携帯を手放すと同時に忘れてしまう。ふと、疑問が湧いた。そもそも、画面に映る海は「本物の海」なのだろうか。そもそも、SNSは私たちが海について理解する上で役に立つのだろうか。

そこで、人気のソーシャルメディアであるTikTok、Instagram、Pinterestで多く

再生された海は、どのような傾向があるのかを調査することにした。これらのプラットフォームにおける傾向の違いから、若者の海に対する向き合い方が見えてくるのではないかと考えたからだ。

12月15日から20日までの5日間、TikTok、Instagram、Pinterestの検索窓の「#海」と「#ocean」を入力し、TikTokとInstagramでは再生数が300万回を超えている投稿を各プラットフォーム15個ずつ選んだ。Pinterestでは、保存数が多い投稿を参考にした。各投稿の内容、撮影方法、加工の有無、コメントの傾向を記録し、プラットフォームごとに傾向を分析した。

TikTokの海は、見ていて楽しいエンタメ性が重視されていた。選んだ投稿動画のうち、7個はAI生成映像や人気クリエイターが制作した海の動画で、8個は波の動きを強調した動画や、普段目にしないような珍しい海の生物の動画が人気を集めていた。エンタメ性を重視しつつも、海の動きを取り入れた動画では、プロのダイバーがサメに遭遇した際の対処法を紹介するなど、「面白い」「驚いた」と思える海が求められていた。Instagramの海は、美しい風景が中心だった。選んだ海の動画のうち12個は、保護区のような自然や、透明度の高い海が多かった。ただし、

それらは身近な海ではなく、「憧れの海」としての側面が強かった。Pinterestの海は、美的感覚を重視したものが多かった。携帯電話のロック画面やビジョンボードなどに利用されることを想定した画像が多く、「いいね」を集めていた。例えば、貝殻にこだわった写真や、色彩豊かな波を捉えた写真は、「本物の海」というよりも「美しい画像」として消費されていた。

プラットフォームによって海の見せ方が異なっているのは、ユーザーがそれぞれに求めるものが違うからだろう。TikTokはエンタメのためのアプリ、Pinterestは美的感覚のためのアプリで、Instagramは「憧れ」を見つけるためのアプリである。アルゴリズムが「再生されやすい海」を優先的に表示するため、同じ海でも異なる姿で見られることになる。しかし、どのプラットフォームにも共通しているのは、海が「コンテンツ」として消費されている点だ。TikTokではエンタメとして、Instagramでは憧れの対象として、Pinterestでは美的素材として、消費されている。私たちは、海を見ているつもりで、加工され切り取られた海の一部しか見えていないのだ。

ビジネスジャーナルの記事によると、総務省の2024年の調査では、若者の

SNS投稿頻度は減少傾向にあるものの、閲覧、保存、リポストといった行動はむしろ増加しており、SNSは「発信する場」から「情報を受け取る場」へと変化しているという。つまり、私たちは大量の海の画像や動画を一方的に浴び続けているだけで、海と双方向的な関係を築いているとは言えない。スワイプして次々と流れていく海は、記憶にも心にも残らない。

では、本当の海との向き合い方とは何なのだろうか。

日本財団ジャーナルで、海洋教育の専門家である海野義明氏は、「では、海が子どもたちの先生です。目に見えている海はほんの一部分でしかありません。自分たちが使っている水はどこへ行くのか、海の見えないところでは何が起きているのかを考え、想像して膨らませてもらえたらいい」と述べている。つまり、本当の海との向き合い方とは、表面的な美しさだけでなく、その奥にあるものにも思いを馳せ、考えることだ。しかし、SNSで消費される海には、その奥深さがない。美しい波の映像はあっても、その海がどこに位置し、どのような生物が生息し、どんな問題を抱えているかは見えてこない。FQ Kidsというサイトでは、自然遊びの専門家である石崎一記教授が、「海という自然の中に飛び込んだら、子供は好奇心で波に触れ

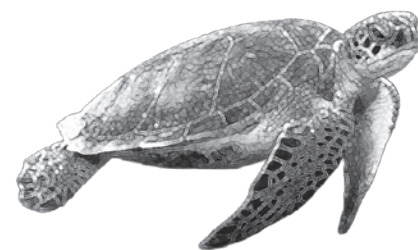
てみたくなるでしょうし、砂浜にカニがいればどうにかして捕まえたくなる。そういった自然とのやりとりが子供の心や頭の中にたくさんのものをもたらす」と指摘している。画面越しの海では、波に触れることも、カニを捕まえることもできない。五感を使った体験がなければ、海は「生きている場所」ではなく、単なる「風景」になってしまう。教育評論家も、「実際に海に行くことで、近年問題視されている海のプラスチックゴミ問題など地球環境に関心を持つきっかけになるかもしれない」と述べている。SNSできれいな海を見ただけでは、海のゴミ問題には気づけない。実際に海に行き、打ち上げられたプラスチックや、波に混じる小さなゴミを目にして初めて、その問題に気づくことができる。

プラットフォームによって海の見せ方は異なるが、どれも「消費される海」という点では共通している。私たちは海を見ているようで、実際にはアルゴリズムが選んだ「見せたい海」を受け取っているに過ぎない。本当の海との向き合い方とは、画面を通して消費することではなく、実際にその場所に立ち、波の音を聞き、潮の匂いを感じ、予期せぬ波の動きに驚くことだ。SNSで海を見ることは、海を知るきっかけにはなるかもしれないが、それだけでは海を知ったことにはならない。海は、スワイプして次へ流すのではなく、立ち止まって向き合うべき存在なのだ。

私自身、これまで何度も海の画像をスワイプしてきたが、実際に海に行ったのは数年前が最後だった。今度は画面ではなく、実際の海に行ってみようと思う。そこで初めて、本物の海に出会えるだろう。



〈選考委員講評〉
せんこういんこうひょう



最相葉月

ノンフィクションライター

1963年東京生まれの神戸育ち。関西学院大学法学部卒業。会社勤務を経てフリー。科学技術と人間、スポーツ、音楽、精神医療、宗教などを取材。『絶対音感』で小学館ノンフィクション大賞、『星新一』100話をつくった人』で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞などを受賞。他の著作に『青いバラ』『セラピスト』『証し』日本のキリスト者』など。児童書に『調べてみよう、書いてみよう』。

「子ども海の文学賞」は年々レベルが上がっており、4年目の今回、小学生の部で非常に優れた作品が寄せられました。疑問を持ち、調査や探究を重ね、人に話を聞くなどの行動によってつづられたノンフィクション作品は、読み応えがあります。今回も子どもたちから新たな視点ももらい、発見の連続でした。

小学生の部は、前回に続き立山さんが最優秀賞に輝きました。「なぜだらけの船」想像をふくらませては、遣唐使船に興味を抱き、疑問に感じたなどを解明しようと、第三者の視点も持って調べを進めていく姿勢が素晴らしいです。わかっていることと、そこから想像したことをきちんと区別して書いており、読む人を作品の

世界に引き込んでいきます。昨年のマンガグローブの作品にも驚かされましたが、さらなる成長を感じ、これからもどんな文章を書くのだろうかと楽しみが尽きません。優秀賞3作品は、いずれも個性が光っています。三宅さんの「アザラシのおなか」は、アザラシに会いに行く楽しみな気持ちからふれあいの様子まで、ユーモアたっぷりに書かれていて、読むと笑顔になります。新谷さんの「一首の歌から広がった須磨の海」は、在原平の歌を通して1000年以上前の人となりが感じ、自分が暮らすまちに思いをはせて足元から広がっていくような世界観を見事に表現しています。志賀さんの「海を走る大型船の誕生物語」大型船に潜むタツク

ス・ヘイブンの「闇」は、船に車が運ばれていく様子などを細やかに観察しており、臨場感たっぷりの書き方がおもしろく、ジャーナリスト的な視点も持ち合わせています。入賞は4作品。若狭さんの「あなをなくす」は、水着に合わせた穴から切り込んでいく焦点を絞ったスタイルで、テンポのよさを感じます。田中さんの「ぼくの地引網」は、体験をもとに情景や感情が生き生きと描かれ、すいすい読むことができます。大宮さんの「またウミガメに会うために」は、好奇心の先に探究があり、次々と浮かぶ疑問を丁寧に解決していく姿勢に好感が持てます。木元さんの「豊かな海をつくるために」は、光景が浮かぶ記述を盛り込み、取材もして丁寧に描いてい

ます。

中学生は、受賞に値する作品が増えたことをうれしく思う一方、全体的にもっとじっくりテーマに向き合い、枚数も含めて書き込んでもらいたいなと感じました。優秀賞は2作品。安永さんの「海が教室になった日」は、海での体験を通して自身の内面を見つめ、気付きが原動力となっていく記録として優れており、文章によって同じ境遇の人を励ます力を備えています。柿本さんの「魚の命と父への感謝」は、父の一言から自然の恵みについて考え、言葉を大切にしながら場面を演出することで、食べ物家族を一つにする様子が伝わってきます。

入賞2作品はいずれも視点を評価しました。西田さんの「進化の証」は、触るのも怖かった魚のぬめりに着目。みさきさんの「ソーシャルメディアが変える海の姿」は、今の時代らしい切り口です。

この文学賞は「海」にちなんだ内容に絞られています。回を重ねるにつれテーマが多様化しており、ページをめくる楽しみが広がっています。自分の目で見て、話を聞き、調べ、考えを深め、自分の言葉で書くという行動のすべてが、経験として皆さんの血肉になっていきます。さらに体験を越えて、会った人のことやその言葉など、第三者を軸にしたノンフィクションにも挑戦してみてください。視野や世界が、ぐんと広がることでしょう。

また今回、学校賞が新設されました。書くことに挑戦する機会があることで、海へ興味を持つ児童・生徒もいることでしょう。先生方へお願いです、ぜひ子どもたちが自由な発想から探究して、文章で表現することを後押ししてあげてください。次回もまた、皆さんの海の作品に触れられることを楽しみにしています。

たなかしん

画家・絵本作家

絵の下地にアトリエのある明石の海の砂を使い、独特のマチエールを生みだす。海砂は波打ち際の細かい部分を使う。そこには、山から運ばれた岩や砂など大地の恵み、海から運ばれた貝殻や珊瑚などの海の恵みが混ざり合う。採取した海砂は塩を洗い流し、天日に干す。そうすることにより、太陽のエネルギーさえもキャンパスに閉じ込める。

画家として活動する傍ら絵本を描き始め台湾の出版社から絵本作家デビュー。以降、国内外で出版を重ねている。「富士茄子牛焦ルギー」(BL出版)で第53回日本児童文学者協会新人賞受賞。

4回目となった「こども海の文学賞」、今回も楽しく書いてくれた作品がたくさん届きました。ノンフィクションは、体験したことにとどまらず、疑問に思ったことを調べ、どのように書いて仕上げているのかを考え、読んだ人に興味を持ってもらえるように工夫することも重要です。そのような取り組みに挑戦することがまず、すばらしいこと。そして、一生懸命向き合った成果としての海の作品から、あらたな発見やワクワクをたくさん受け取っています。連続応募の常連が出てきているのもうれしいことですし、

文章から成長を感じられることも幸せに思います。

小学生の部の最優秀賞は、2年前優秀賞、前回最優秀賞だった立山さんの作品「なぞだらけの船」想像をふくらませて」が選ばれました。興味を持った遣唐使船について、さまざまな方向からとことん調べていく行動力と考察力、情熱が、丁寧な文章から伝わってきます。身近な存在の学校に例えて想像することで、わかりやすくなるよう工夫し、原稿用紙20枚を書き上げ最後まで読ませる文章力も抜群です。

優秀賞3作品も力作ぞろいです。三宅さんの「アザラシのおなか」は、かわいくて素直な言葉で書かれていて、水族館の中をドキドキしながら一緒に進んでいくような気持ちで読みました。新谷さんの「一首の歌から広がった須磨の海」は、歌が詠まれた時代からの時の流れと、海が身近にある場所という、時空間を描いた絵巻物のようで、この文学賞に新しい風を吹き込んでくれました。志賀君の「海を走る大型船の誕生物語」大型船に潜むタックス・ヘイブンの闇」は、原稿20枚の中で疑問を解き明かしていきながら、小ネタも随所に盛り込まれ、作品に厚みがあります。

水着のあなにこだわり、クスッと笑えるエピソードをリズムよくつづった若狭君。地引網の体験を、自分の言葉で巧みに情景描写した田中君。興味を持ったウミガメのことをしつかり調べ、環境問題を自分事として考えた大宮さん。豊かな海への取り組みについて、現場を訪ねる市役所職員に話を聞き一歩踏み込んだ木元君。入賞4作品も、

個性が発揮された味わい深い秀作ばかりです。

中学生の部は、今回も最優秀賞作品がなかったことを寂しく思いますが、過去最多となる4作品が受賞しました。優秀賞のうち、安永君の「海が教室になった日」は、海が学びの場となった経験に加え、葛藤も正直につづることで、文を書くことも居場所をつくることにつながっていることに気付かせてくれます。柿本さんの「魚の命と父への感謝」は、よだれが出そうになるくらいおいしそうな表現や、まっすぐな感謝の気持ちによって、みずみずしさのある物語となっております。

入賞では、苦手だった魚のぬめぬめを調べていった西田さんは、目のつけどころがいいですね。ソーシャルメディアをテーマにしたみさきさんの着眼点は、SNS世代の得意を生かしていて、興味深く読ませてもらいました。

さらに今回から学校賞が設けられ、毎年多数の応募がある明石市立大観小学校と、2名が受賞した長崎県の長与町立長与中学校が選ばれました。学校関係の方々には、子どもたちが海へ関心を持ち、調べて書ききつかけを広げていただけましたら幸いです。

調べて書くことに対して、高いハードルを感じる人も多いかもしれませんが、おもしろいと思ったりとことや気になったことについて、とことん調べて、どんどん書いてみてください。調べることで新たな知識が身につく、積み重ねていくことで何かの役に

立ったり、誰かの助けになれたりすることがあると思います。

こども海の文学賞は、海をテーマに書くことに挑戦した多くの作品によって、進化してきています。日常の中にも、海について考えられることはたくさんあります。あなたの視点からの海のノンフィクションを、ぜひ届けてください。

あとがき

川崎喜昭

あかし 明石おさかな普及協議会会長

子どもたちが海に興味を持ち、書いて伝える機会として2022年に創設した「子ども海の文学賞」は、4回目となりました。今回は2025年7月21日の海の日から募集を開始し、小学生56点、中学生24点、計80作品が寄せられました。地元の明石市をはじめ、全国各地から豊かな表現の力作が届き、大変うれしく思っております。

明石おさかな普及協議会は、明石市公設地方卸売市場にある水産の卸業者、仲卸業者でつくる団体で、おいしい海の幸をたくさん食べてもらいたいと普及啓発の活動を行っています。子ども海の文学賞は回を重ねるごとに作品のテーマが多様になり、レベルも高くなっており、私たちも豊かな海を未来へつなげていかなければならないという思いを強くしております。

小学生の部の最優秀賞は、3年生の立山怜佳さんの「なぞだらけの船く想像をふくらませて」が選ばれました。歴史好きならではの視点で遣唐使船のなぞに迫っており、興味深く拝読しました。1年生で優秀賞、今回は2年連続での最優秀賞となり、文章から成長を感じられ頼もしく思います。また、優秀賞3作品、入賞4作品も読みごたえがあり、受賞に至らなかった作品からも多くのメッセージが伝わってきました。

中学生の部は優秀賞に2作品、入賞に2作品が入り、受賞作品が過去最多となりました。次回はぜひ、初の最優秀賞が誕生することを期待しております。

さらに今回から、選考委員会でのご意見を受け、「学校賞」を新設しました。毎年多数応募いただいている地元の明石市立大観小学校と、2名が受賞した長崎県の長与町立長与中学校が初の受賞校となりました。今後、授業等で取り組むきっかけとしていただけましたら幸いです。

この文学賞では、卸売市場の見学会や体験の機会を設け、地元の小学校では書き方の出前講座も行っています。そのような場や表彰式で子どもたちの生き生きとした表情を見ると、大きな可能性を実感します。本作品集を多くの方にお読みいただき、子どもたちからの熱いメッセージを受け取ってください。

最後になりましたが、選考委員、協賛や協力の団体・企業、講座開催や告知など

で関^{かか}わってくださった方々^{かたがた}、応募^{おんぼ}を取りま^とめてくださった学校^{がっこう}関係者^{かんけいしゃ}はじめ、企^き画^{かく}、実施^{じじし}にあたりご尽力^{じんりよく}いただいたすべての皆様^{みなさま}に厚^{あつ}く御礼^{おれい}申し上げます。

作品集資料

〈小学生の部〉

最優秀賞

「なぞだらけの船く想像をふくらませて」 立山 怜佳 大阪市立阪南小学校 三年

優秀賞

「アザラシのおなか」 三宅 董 倉敷市立緑丘小学校 一年

「一首の歌から広がった須磨の海」 新谷 まり香 神戸市立東須磨小学校 五年

「海を走る大型船の誕生物語く大型船に潜むタックス・ヘイブンの闇く」

志賀 優龍 豊橋市立福岡小学校 六年

入賞

「あなをなくす」 若狭 早 愛媛大学教育学部附属小学校 二年

「ぼくの地引網」 田中 佑築 船橋市立田喜野井小学校 五年

「またウミガメに会うために」 大宮 来奈 江東区立豊洲北小学校 二年
「豊かな海をつくるために」 木元 孝亮 伊丹市立荻野小学校 六年

学校賞

明石市立大観小学校 (兵庫県)

最終候補作品

「青いくつと海のふしぎ」 工藤 壮一郎 中央区立久松小学校 三年

「海との戦い方」 田中 勇風 船橋市立田喜野井小学校 二年

「エイが見守る僕らの海く江井島小学校での六年間く」 松下 泰知 明石市立江井島小学校 六年

「楽しい！地元の里海！」 和田 絢太郎 神戸市立東舞子小学校 五年

「鳴門大橋のうずしお」 長池 真海 明石市立大観小学校 五年

「初めて気づいた海の小さな命の存在」 山田 悠末 明石市立大観小学校 五年

「ぼくがほこる明石の海」 坂本 泰士 明石市立和坂小学校 三年

「ぼくの知らなかった海の真実」 山田 統琉 明石市立大観小学校 五年

〈中学生の部〉

優秀賞

「海が教室になった日」
やすなが まもる しょうようちゅうがっこう 二ねん
「魚の命と父への感謝」
かきもと あんな ながよちよりつながよちゅうがっこう 二ねん
柿本 杏奈 長与町立長与中学校二年

入賞

「進化の証」
にしだ なほ ながよちよりつながよちゅうがっこう 二ねん
西田 名穂 長与町立長与中学校二年
「ソーシャルメディアが変える海の姿」
みさき すがた

学校賞

長与町立長与中学校（長崎県）

最終候補作品

「今と昔」
いまむかし やまやち そつたろう ながよちよりつながよちゅうがっこう 二ねん
山口 蒼太朗 長与町立長与中学校二年
「心に残った青」
わたなげ しずく ながよちよりつながよちゅうがっこう 二ねん
渡邊 雫 長与町立長与中学校二年

「五島の思い出」
さいとう しょう ながよちよりつながよちゅうがっこう 二ねん
齋藤 匠 長与町立長与中学校二年
「遠い海で気づいた近さ」
とおみ ちか A Y A Y A
「のんのんかんおんじ」
さかもと たかひと みましりつえはらちゅうがっこう いちねん
坂本 孝仁 美馬市立江原中学校一年
「僕の家」
ぼく うみ すみだくりつぶんかちゅうがっこう いちねん
島田 考輝 墨田区立文花中学校一年

だい かい
第4回 ことも海の文学賞 作品集

なぞだらけの船く想像をふくらませて

2026年7月1日 第1刷発行

はっ ころ
発行 明石おさかな普及協議会
ひょうしきしえひらいしほ
表紙挿絵 平井志歩
そく
装丁 北原和規 (UMM)
きょうりよく あかしぎよぎょうくみあいれんごうかい
協力 明石市漁業組合連合会
ひょうごけんぎよぎょうくみあいれんごうかい
兵庫県漁業協同組合連合会
あかしりつじやかん
明石市立図書館
かぶしきがいしゃ
株式会社ベンコム
かぶしきがいしゃ
株式会社ライツ社

ことも海の文学賞HP
<https://www.akashi-osakana.org/bungaku/>

ほんしよむだんでんさいふくせいきん
本書の無断転載・複製を禁じます。